

酷寒への適応——「先史モンゴロイド」のシベリアへの移住と拡散

木村 英明

シベリア

大小無数の沼沢が広がる西シベリア低地帯、コケを食みながらトナカイが移動する荒涼としたツンドラ極北地帯、ダフリアカラマツの森林が累々と続く東・中部シベリアのタイガ地帯、みずみずしい草原が盆地から山の頂きにまで延々と展開する南部シベリアのステップ地帯、モンソンの影響を受ける極東の針広混交林地帯など、およそ北緯五〇度〜七五度に広がるシベリアは様々な顔を見せている。そのシベリアも、多くは酷寒の環境下に置かれており、不毛の地の印象が強い。しかし、厳しい自然のシベリアにも、人類の確かな営みがある。とりわけ北方モンゴロイドと呼ばれる人々の生活は、モザイク状ではあるがシベリア全域に及び、彼らの顔、かたちにも、北方への巧みな適応が認められると、人類学者は言う。人類が、いつ、なぜこのシベリアに進出し、どのような戦略をもって寒地適応を果たしたのか。また北方モンゴロイドの成立とどのようにかかわるのか。これまでのところ、必ずしも十分な解答が得られているとは言いが、考古学からその可能性を探ってみよう。

なお人類は、シベリアを越えてアメリカ大陸、あるいは日本列島へと拡散したことが知られているが、中継地として要衝の地にあたるシベリアの研究は、両地域への拡散の問題を解きあかす上でも重要である。

シベリアの暑い夏

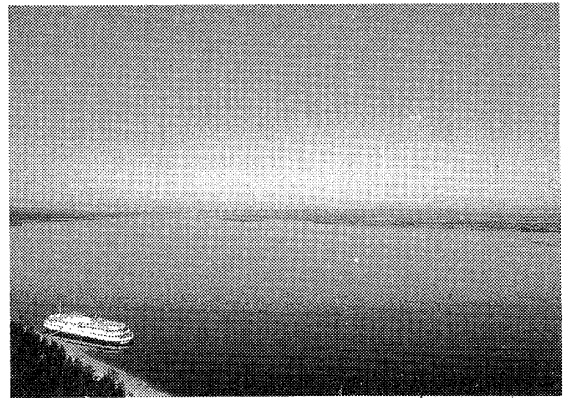
シベリア各地の月平均気温に関する統計資料は、一口にシベリアと言っても、地域によってかなりの差があることを示している(表1)。しかし、年平均気温が零度以下になる例が多い。なかでもヴェルホヤンスク、ズィリヤンカは、年平均気温が零下一〇度以下、真冬でも零下三〇度以下となる。しばしば零下六〇度以下になることが知られており、「北半球寒気の極点」と言われる。零下三〇度以下にまで下がり、強い風が吹こうものなら、一〇分としてじっと立ってられない。寒極の地での人々の冬の生活がいかに厳しいかが想像される。しかもここで扱わねばならない最終氷河期の一番厳しかった時期には、年平均気温が七〜八度下がったことが知られている。これほどの気温低下が、実際の人間生活にどの程度の影響を与えていたのか、詳しい解析が望まれる。しかし一方、月別に平均気温を比較すると、夏季における平均気温の地域差は、年平均気温、あるいは冬季における平均気温ほどに顕著な差がないのである。すなわち、表から理解されるのは、年平均気温の高低には特に冬の気候が関係しているらしい。言い換えれば、寒冷化現象は、とくに冬に影響を及ぼすらしいことである。ヤクーツクで、零下六〇度以下にまで下がる冬は知られていても、四〇度前後の暑い夏があることについてはあまり知られていない。夏季に限るならば、短い、長い差はあるが、シベリアのどこでも、十分に快適な生活が



シベリアの大地には、広く、厚く永久凍土層が発達している。場所によっては数100メートルにも達すると言われている。その永久凍土層中に形成された氷の層・エドマ層（ヤクーツク地方中部）



森林伐採のため永久凍土の表面が融解してできた凹地・アラスと、地中の氷楔が発達してできた小高い丘・ピンゴ（ヤクーツク地方中部）

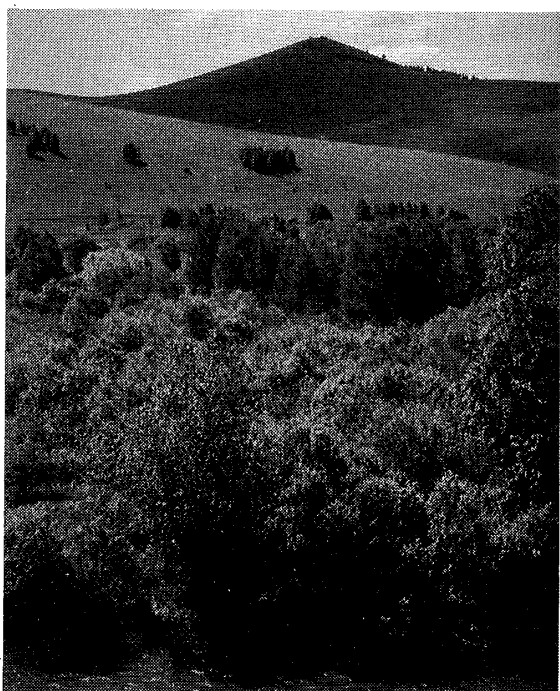


果てしなき地上の怪物・シベリアのタイガ
チェーホフが抜けだせない怪物の胎内にたどえたシベリアの密林帯は、ツンドラの南に展開し、人々を圧倒する。その広さは700万平方キロにも達する。永久凍土層の上（活動層）をほうのように成育するダフリアカラマツをはじめ、モミ、マツ、シベリアスギ、シラカバやハンノキなどが、地域ごとに多様な景観を作り、特色ある、また豊かな食物連鎖を形成している。ヘラジカなどが棲むシベリアタイガも、旧石器時代にはマンモスステップにおおわれていたらしい。タイガをぬって流れるレナ河（上）も、厳寒期には、ハイウェイの役割を果たしていたに違いない

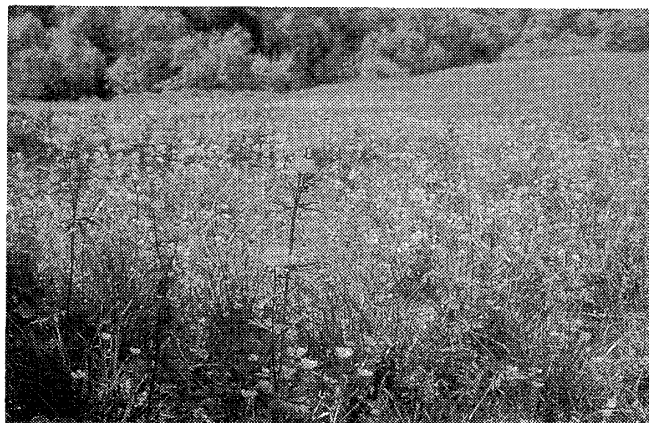
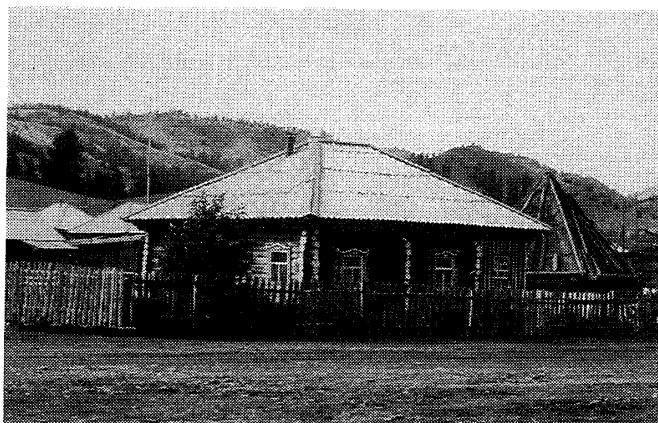


シベリアの碧い瞳・バイカル湖

“昔、神様が地球を造り、バイカル湖を造った。その際バイカル湖から掘り出した土を太平洋に運び日本列島ができた”と伝説にある。日本列島を逆さにしたようなバイカル湖は、面積約200平方キロ、深さ1620メートル、透明度40mで世界第1位。特有な動植物相が古来、人々の移住に大きな役割を果たしたに違いない。左は観光地として有名なベスチャーナヤ入江。



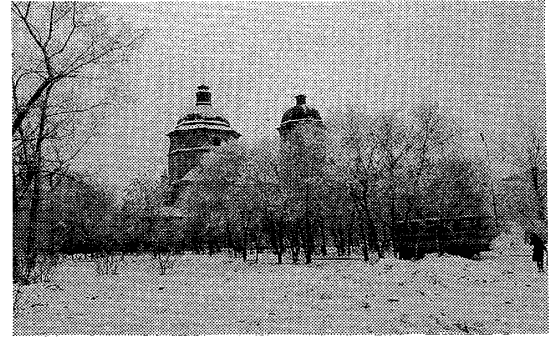
2~4000メートルの高さで連なる鋭い稜線、スヨロザウルスや剣竜などの恐竜の背中を思わせる山肌に突き出す白い石灰岩、山深く広がる草原のじゅうたん、そしてジャルキ（キンバイの仲間）など高山植物の花模様は、山地アルタイの魅力的な景観である。野牛を追う旧石器の狩人、蜜蠟に魅せられた遊牧の民など、多くの人々が行き交い、数々の歴史ドラマを生んできたこの地に、伝統的な八角形の屋根の家とロシア式の家が同居し、現代の文化交流がある。物思いに浸るアルタイ人。どこにでもいそうな日本風の顔は何を意味しているのだろうか。山村はウスチカン村。





アムール河に糸をたらずイバキ (太公望)

ギリヤーク語の「ダムール」(大河)に由来するというアムール河は、国境地帯をぬって珍しく西から東に流下し、やがてオホーツク海に注ぐ。11月下旬早くも厚さ1mの氷におおわれ、氷上釣りをいそしむ人々にぎわう。そのなりわい、光景は後期旧石器時代にまでさかのぼる原風景かもしれない。



イルクーツクのマロース (厳寒)

シベリアの冬は、10日程の周期で烈しい寒気がやってくる。生木が裂けるような酷寒もある。冷えこんだ日のシベリアっ子の挨拶は、きまって「凍れますネ」で始まる。暗く沈んだシベリアの冬にあって、太陽が差しこんだ時だけは、ダイヤモンドダストが空中を舞い、柳などの街路樹に咲き誇る樹氷が光り輝き実に美しい。

(統計期間1951-1980)

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	年
ヴェルホヤンスク	-46.3	-43.5	-30.2	-13.6	2.1	12.9	15.1	11.0	2.3	-15.2	-36.3	-44.1	-15.8
ズィリヤンカ	-35.8	-33.7	-26.0	-12.5	2.8	13.2	15.4	12.0	3.8	-11.5	-28.6	-34.8	-11.3
ヤクーツク	-42.0	-36.6	-22.7	-7.0	6.3	15.6	18.7	15.2	5.8	-8.6	-29.4	-39.4	-10.3
ハバロフスク	-21.5	-17.6	-7.7	3.3	11.6	17.5	20.9	19.4	13.4	4.4	-8.1	-18.0	-1.5
イルクーツク	-19.7	-17.6	-8.4	1.0	8.9	15.4	17.7	15.2	8.5	0.8	-9.4	-17.1	-0.4
クラスノヤルスク	-16.2	-15.9	-7.6	1.2	9.0	15.9	18.6	15.2	8.9	0.8	-9.2	-14.7	0.5
バルナウル	-15.9	-15.8	-8.2	2.5	11.9	18.0	20.0	16.7	11.2	2.5	-7.6	-14.3	1.8
チタ	-25.8	-22.5	-11.2	-0.2	8.6	15.7	17.8	15.4	8.0	-1.6	-14.2	-23.4	-2.8
ブラゴベンチェンスク	-24.1	-18.9	-9.0	3.2	11.9	18.3	21.2	19.1	11.9	2.3	-11.0	-21.4	0.2
ヴラヂポストーク	-13.4	-10.8	-2.7	4.1	9.5	12.9	17.4	19.5	15.5	8.4	-1.1	-9.4	4.2

表1. シベリアの各地の月平均気温(°C)

できると言うわけである。

シベリアへの人類の移住と拡大にかかわる考察は、こうした環境の季節的变化を抜きにして考えることは難しい。これまでの研究で、シベリアにも多数の旧石器時代の遺跡が存在することが調べられており、わずかながらも、一年を通して生活するタイプ、季節的に生活するタイプなど同じ旧石器時代の遺跡に様々な生活様式の存在が予想されている。やがて詳しい解説が可能となるだろうが、ここでは、大きな見通しを示すにとどめたい。

化石にみる先史モンゴロイド

さて、シベリアにおける「先史モンゴロイド」の成立、あるいはその拡散を論ずる場合、旧石器時代の人類化石は欠かすことのできない資料である。しかし、これまでのところアルタイのオクラドニコフ記念洞穴、クラスノヤルスク市のアフオントヴァ山II遺跡、イルクーツク北方のマリタ遺跡の三例が知られているくらいである。

そのうちのひとつ、かつてシビリチーハと呼ばれていたオクラドニコフ記念洞穴遺跡では、第二層、第三層から臼歯が数点発掘されている。その臼歯に、ムステリアン尖頭器、ルヴァロワ石刃・剝片が伴っており、人類化石としてはシベリア最古の資料ということになる。歯の形態学、すなわち大臼歯の咬合面に出現する小結節の形状などから、一部にモンゴロイドとの関連が予想されている。しかし、人種のタイプを即断できる状態にはない。仮にそうであったとしても、後述するように、「先史モンゴロイド」の主演というわけにはいかない。

一方、アフオントヴァ山II遺跡では、一九三七年に頭骨片が発掘されている。それを研究したデーベツは、凹凸の少ない特徴などから、モンゴロイドタイプであるとした(Deben 1946)。地質学者のツェイトリンによると、その年代は二万年ぐらい前であるという(Цейтлин 1979)。石器の組み合わせから見ると、それほどには古くならないと思

われるが、人種のタイプについて結論を下せる貴重な資料である。

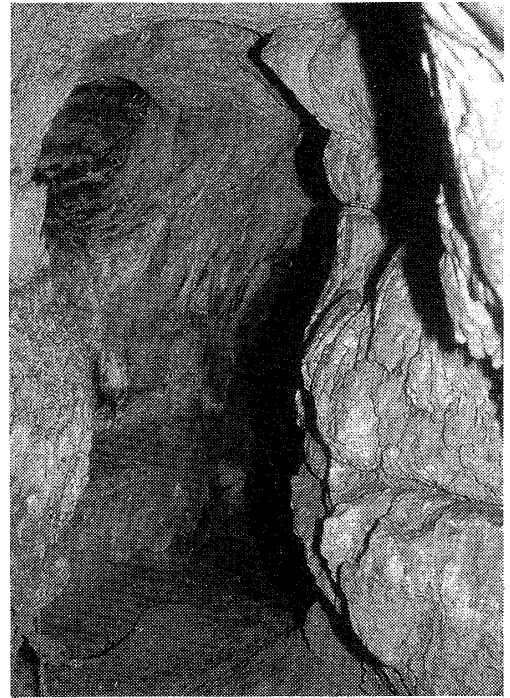
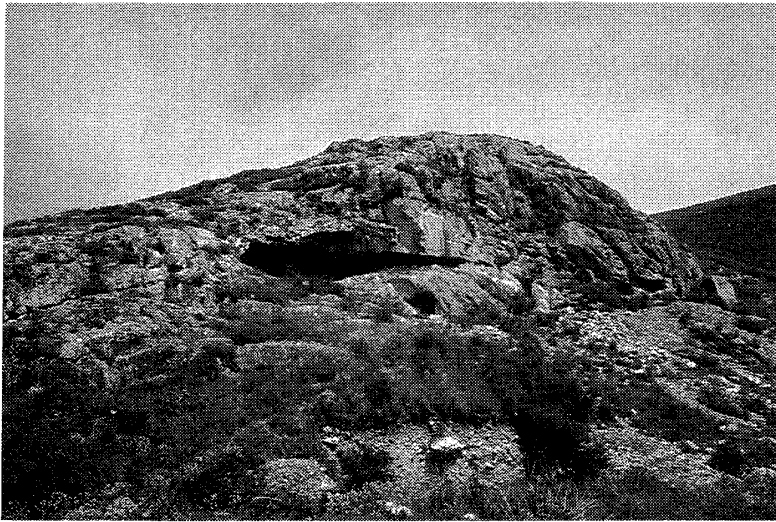
マリタ人とターナー説

マリタ遺跡では、一九二九年ゲラシモフによって、一つの墓から幼児の遺体が発掘されている（Трещинков 1931・35・58・61）（図1）。保存良好とは言えず、顔面部を除く頭蓋骨、下顎骨の他、肩甲骨の骨端や鎖骨・尺骨・橈骨・頸椎・胸椎・肋骨などわずかな部位が残されていただけである。発見当初、ゲラシモフが「二重歯列」の持ち主と考えたように、歯が特別多かったのであるが、ロシア（旧ソ連）科学アカデミー付属考古学研究所長のアレクセイエフ（人類学者）と同サント・ペテルブルグ（旧レニングラード）支部民族学研究所人類学部のゴフマン、及びアリゾナ大学のターナーらの研究によって、二体分（一体は三―四才のもの、他が一〇―一四カ月のもの）であることが近年になって明らかにされた（Амекеев・Тохман 1987, Turner 1986, Тернер 1990）。そのターナーの研究が注目されている。彼は、未出の永久歯の特徴などからマリタ人をユーロポイドと考えている。しかしターナーの研究の経緯をたどると、当初マリタの幼児の歯にシャベル状の切歯は存在しないとされていたが、その後名言を避け、しかもシャベル状の切歯はユーロポイドにもあるという表現に変化している。その有無についての見解は今ひとつはっきりしないが、意見を修正したかのように推察される。ただし、マリタの資料をユーロポイドとみる考えには変わりがなさそうである。果してどうか。旧レニングラードの民族学研究所人類学部で実物（本来はエルミターシュ所蔵）を見る機会があったが、シャベル状切歯の存在は動かし難い事実である。ターナーの高説にもかかわらず、モンゴロイドとする考えが依然として残されていることを資料は物語っている。筆者は、旧石器時代における石器文化の連続性を重視し、モンゴロイドタイプとみなすのが適当と考えている（木村一九九一）。

人類学的所見の結論は、少なくとも旧石器時代の後期に、あるいはもっとも確かなアフォントヴァ山II遺跡の資料によれば、細石刃文化期に、モンゴロイドタイプがシベリアにいたとすることができる。

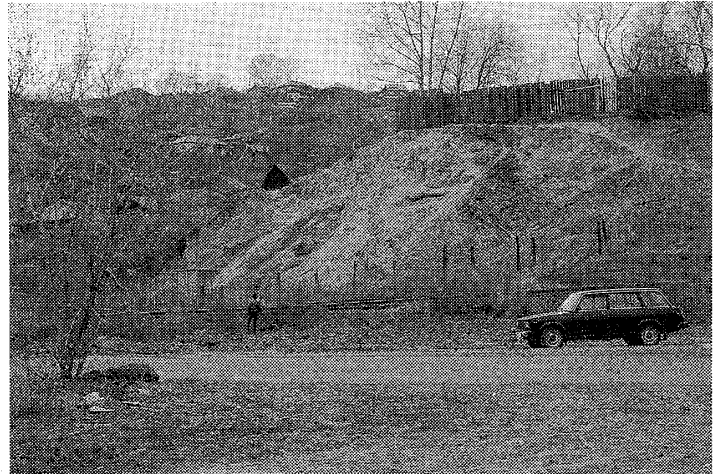
シベリアの旧石器文化

図2は、シベリアの旧石器時代の遺跡について特に重要と思われるものをドットしたものである。これまでに明らかにされた遺跡の実際の数は、少なくともこの一〇倍をはるかに越すのは確実である。しかし一見してわかるように、研究が進んでいる地域は、オビ河の上流域にあたるアルタイ地域、エニセイ河中流域のクラスノヤルスク市を中心とした地域、イルクーツク市を中心としたアンガラ河流域、ザバイカル地方、ヤクーツク市を中心としたレナ河とその支流のアルダン河流域、そして極東地域というように、一部地域に限られている。すなわち、基本的には調査がしやすい都市部、その周辺、あるいは河川流域ということである。こうした調査研究の偏りはあるものの、シベリアにおける旧石器文化は、およそ七段階に分けて考えることができる（木村一九九一）（表2）。第一期は、風化に富んだ石英製の礫器を特徴とする段階、第二期は、アシュール伝統のビファース（ハンドアックス）を特徴とする段階、第三期は、ムステリアン伝統のルヴァロワ技法が発達した段階である。以上が、前期？、および中期旧石器時代に対比されるものである。第四期は、後期旧石器時代への過渡的状況を示すルヴァロワ技法から石刃技法が出現する段階である。以降後期旧石器時代で、第五期は、石刃技法が発達・普及し、葉形尖頭器が出現する段階、第六期は、石刃が小型化する一方、道具の器種分化が著しく進み、特に尖頭器が発達する段階、第七期は、細石刃および楔形細石刃核が出現・普及し、植刃尖頭器など組合せ道具が発達する段階である。



ネアンデルタール人の住居

骨角器をはじめ、動物の骨が沢山発見されるシベリアでも、旧石器時代の人の骨の発見は、極めて稀である。狭い通路、低い天井、条件がそれほど良くないオクラドニコフ洞穴にも人が住みついていたことが知られている。歯の特徴からネアンデルタール人とされ、しかもモンゴロイドの特徴が認められるとも言われる。頭骨など、より確かな資料の発見が期待されている。



アフォントヴァ山II遺跡

クラスノヤルスク市西部、アフォントヴァ山の裾部を洗うエニセイ河の左岸にあり、第2段丘堆積物中に2枚の文化層が発見された。1937年、デーベツによって下部層より頭骨片が検出された。

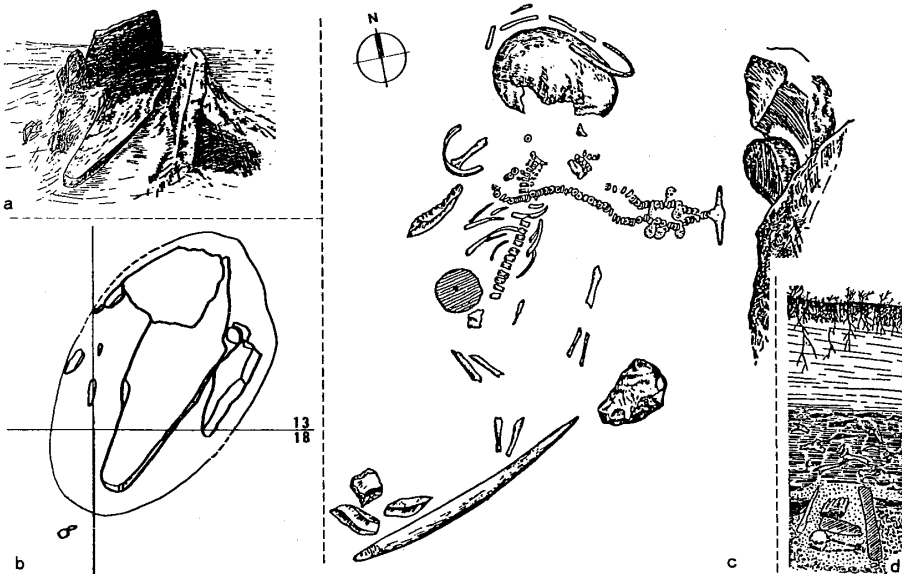


図1 マリタ遺跡A地区発見の幼児埋葬
(Герасимов 1931・1935より)

a・石組スケッチ, b・墓域と石組平面図,
c・幼児埋葬平面図, d・断面スケッチ

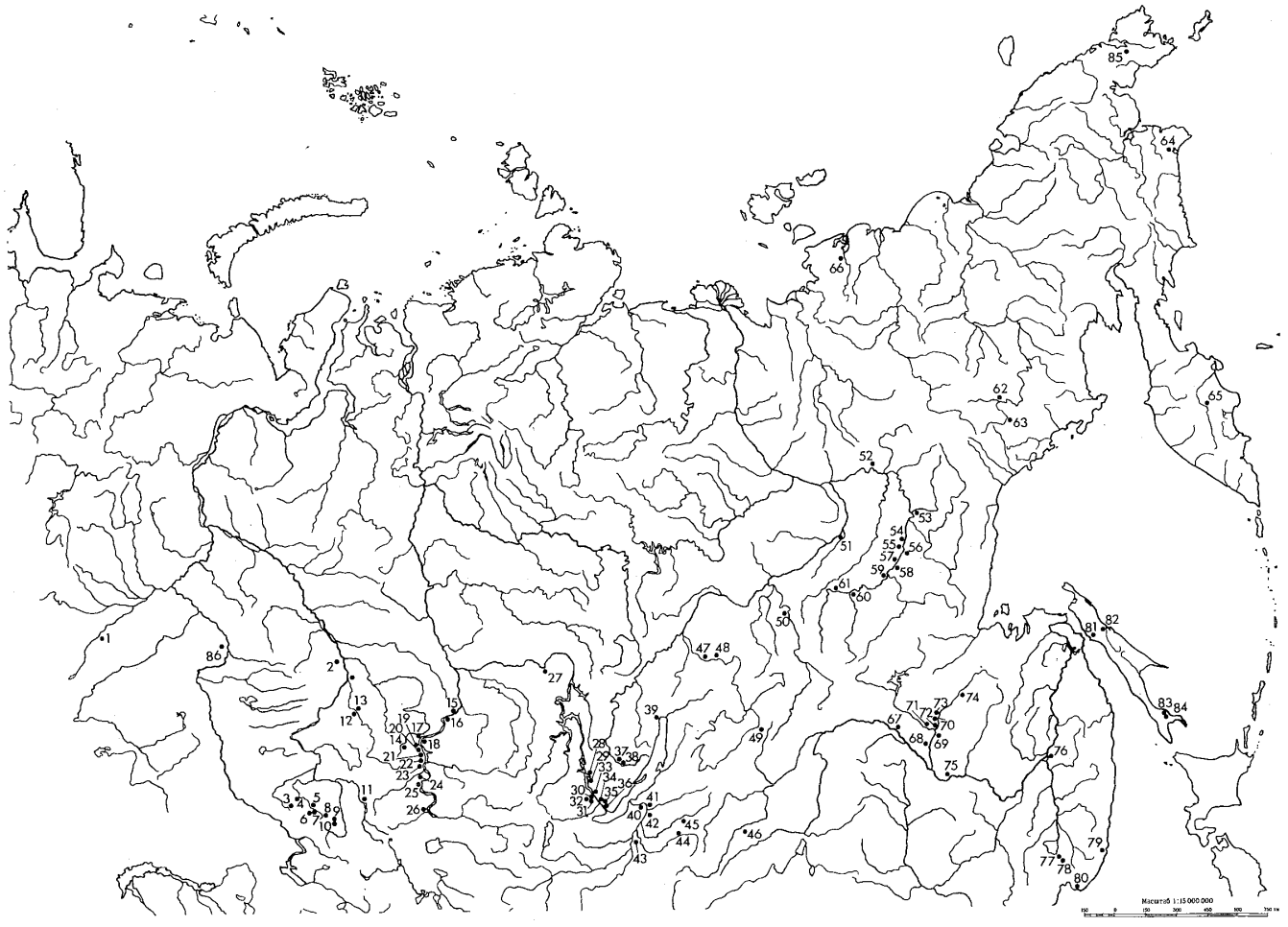


図2 シベリア旧石器時代の主な遺跡

- | | | | | |
|-----------------|---------------|----------------|-----------------|----------------|
| 1 シカエフカ | 2 ヴォルチャヤ・グリヴァ | 3 ストラシュナーヤ洞穴 | 4 オクラドニコフ記念洞穴 | 5 デニソワ洞穴 |
| 6 ウスチ・カーミンナヤ洞穴 | 7 ウスチ・カラコル | 8 ウスチ・カン洞穴 | 9 チュメチン | 10 カラ・ボム |
| 11 ウラリンカ | 12 モホヴォ I | 13 モホヴォ II | 14 マラヤ・スィヤ | 15 アフォンツヴァ山 |
| 16 リストヴェンカ | 17 ノヴォセロヴォ | 18 ココレヴォ IV | 19 ココレヴォ II~III | 20 タラチーハ |
| 21 タシュトィク | 22 アファナシエヴォ山 | 23 ドヴグラスカ | 24 ゴルバヤ I | 25 マイニンスカヤ |
| 26 ケムチュク | 27 ウスチ・コヴァ | 28 クラスヌィ・ヤル | 29 イグチェイスキー・ログ | 30 ウスチ・ベラヤ |
| 31 ソスノーヴィ・ボル | 32 マリタ | 33 プレチ | 34 ヴェルホレンスカヤ山 | 35 オレンヴォフスキー記念 |
| 36 陸軍病院 | 37 マカロヴォ | 38 シュンキーノ | 39 クールラ | 40 オシュルコヴォ |
| 41 サンヌィ・ムイス | 42 ヴァルバリナ山 | 43 ウスチ・キャフタ | 44 ストジュノイエ | 45 トルバガ |
| 46 イカラル | 47 ボリショイ・ヤーカリ | 48 アプディハ | 49 ウスチ・カレンガ | 50 ノーヴィ・レーチェン |
| 51 ディリング・ユリヤフ | 52 イヒネ | 53 エジャンツイ | 54 ウスチ・ミリ | 55 エリカデ |
| 56 ヴェルフネ・トロイツカヤ | 57 ビリル | 58 ジュクタイ | 59 チュムルール | 60 ウスチ・チンプトン |
| 61 スムナギン | 62 マイオルチ | 63 ウスチ・デトリン | 64 イナシクヴァアム | 65 ウシュキ |
| 66 ベレリョフ | 67 クマラ | 68 ウスチ・トウ | 69 グロマトゥハ | 70 ボロガヤ |
| 71 フィリモシュキ | 72 ズメイナヤ | 73 バルカスナヤ・ソープカ | 74 ウスチ・ウリマ | 75 タンボフカ |
| 76 ハバロフスク | 77 オシノフカ | 78 ラズドリノエ | 79 ウスチノフカ | 80 地理学協会洞穴 |
| 81 アド・チモヴォ | 82 イムチン | 83 ソコル | 84 タコエ | 85 クィムィネイケイ |
| 86 チェルノ・アジョーリエ | | | | |

最初の訪問者—シベリアは人類の発祥地か？

最初の段階は、近年話題を呼んでいる資料である。ヤクーツク市からレナ河上流を一四〇^{km}ほどのさかのぼった左岸に、ディリング・ユリヤフ川が流れ込んでおり、その合流地点にディリング・ユリヤフ遺跡がある (Моранов 1988) (図3)。

ヤクーツクの考古学研究所のモチャーノフらの発掘によるが、第五層 (礫層、深いところで地表下四〇^{cm}) 中に文化層がある。二〇〇〇平方^mという広大な面積が発掘され、一六の集中地点と三千点ほどの石英製の礫器やスクレプロ、剝片、礫が発見されている。この種の石器に関しては、従来、人工品であるかどうかの問題があつたが、それらとは事情を異にしている。ここでは、剝片と石器とが、あるいは礫と剝片とが、時に集中地点を越えて接合するという関係も調べられており、人工品と認めて間違いない (図3—2)。そしてそれらは風食を受け、その古さがかなりのものであることが、容易に予想される。果してどこまで遡るかが問題である。

写真の左二点が、礫の一端を簡単に加工して刃部を作りだした礫器である。また右三点は、シベリア的に言うくと、スクレプロ (大形削器) である。いくつかの剝片が接合する資料の一つにつき、打ちかきの方向を矢印で示し、その手順を復原してみると、それらが自然の状態であるものではないということがはつきりする (図3—2)。

モチャーノフは、ディリング・ユリヤフの石英製の礫器を主体とした一群の年代について、古地磁気法で算出された一八〇—三二〇万年前を採用し、シベリアでの最古の石器群であることは言うに及ばず、人類の「アフリカ起源説」に対抗する大胆な仮説を提示している。しかしながら、年代推定に問題があるとして、地質学者、考古学者の賛同を受けるに至っていない。

人類の発祥地がヤクーツクにあつたとは考えにくいものの、石器の様子、あるいは地質学的な状況から、すなわち、強い風によって堆積

物が吹き飛び、吹きさらしで石器が烈しく風食を受ける時期と、強い風によって厚く風成堆積物が覆う時期とが幾度も繰り返された状況から、他の遺跡より古いものであることは認めてよさそうである。地質学者のアレクセイエフの意見 (六九—五万年前) や植生から予想される古環境 (温暖期を指標とする時期) なども考慮し、トボリスキー間氷期、ヨーロッパで言うミンデル/リス間氷期に仮に位置づけた (木村一九九二)。

その系統についても、常識的には中国での石器文化の北上ということになるが、中央アジアのタジキスタンなどにこのような礫器を持つ一群が知られており、西からの出自を考慮しておく必要がある。いずれにせよ、シベリア最初の訪問者として重要と思われるが、多くは今後の課題と言えよう。

次の段階、すなわちカザンツェフスキー間氷期、ヨーロッパ地域のリス/ウルム間氷期における人類の進出が最近明らかになりつつある。図4は、クズバスの近くに位置するモホヴォII遺跡から出土した資料である。ノヴォシビルスクの考古学・民族学研究所長のデレヴァンコらは、アシユールのハンドアックス (握斧) と同系統のもので、地質年代も明らかに古いものであると考えている (Дереванко и др. 1992)。トーヴァのサグルイ遺跡の表採資料もこの段階のものである可能性があるが、この温暖期での生活圏の拡大は南西シベリアに限られている。

ステップの住民たち

次のズィリヤンスキー氷河期の段階に、遺跡の集中と一定の広がりがある。この酷寒期における最初の挑戦は、ムステリアン伝統ルバロワ技法を持った人たちの西からの流入である。技術の発達に導かれたものであるが、剝しとる石器素材の形状をあらかじめ想定しつつ、計画的に調整・加工を繰り返していく技法は、シベリアにおける

表2 シベリアにおける旧石器文化の変遷

年代	第四紀編年(シベリア)	(ヨーロッパ・アルプス)	シベリアの旧石器文化		時期区分
1.1万	氷期	サルタン4	ウ	WIV	VII期
		サルタン3			
2.5	氷期	サルタン2	ル	主ウルム最盛期 WIII	VI期
		サルタン1			
5.5	氷期	カルギン2	ム	WII	V期
		カルギン1		ゲ間トワイゲル期	
8	氷期	カザンツェフスキー間氷期	氷期	WI / WII	IV期
		ズイリヤンカ3		WI	
12	氷期	ズイリヤンカ2	期		WI
		ズイリヤンカ1			
25	氷期	リス/ウルム間氷期	リス氷期	R III	II期
		タゾフスキー氷期			
		シルチンスキー間氷期(メソフ)			
40	氷期	サマロフスキー氷期	ミンデル氷期	R I	I期
		トボリスキー氷期			
	氷期	ミンデル氷期			

◇北極地域への進出 ベレリョフ
 デニソワ9層
 カミンナヤ上層 ココレヴォ
 ヴェルホレンスク山 オシュルコヴォ
 アフォトヴァ山 デュクタイ ウシュキ
 ソスノヴィ・ボル
 クラスヌイ・ヤル クラ

◆細石刃の出現と植刃器の発達
 ◇寒冷気候への適応 マリタ プレチ ウスチ・コヴァ
 ◆石刃の小型化と葉形尖頭器の普及

マラヤ・スイヤ ヴァルヴァリナ山 トルバガ
 マカロヴォIV
 ◆石刃技法の発展と器種の分化 葉形尖頭器の出現
 地理学協会洞穴
 カラ・ボム アレンボフスキー記念
 ◇北方および東方への進出
 ◆ルバロワ技法から石刃技法の出現

↑

オクラドニコフ記念 クルタク イグチエイ
 デニソワ下層 カミンナヤ下層

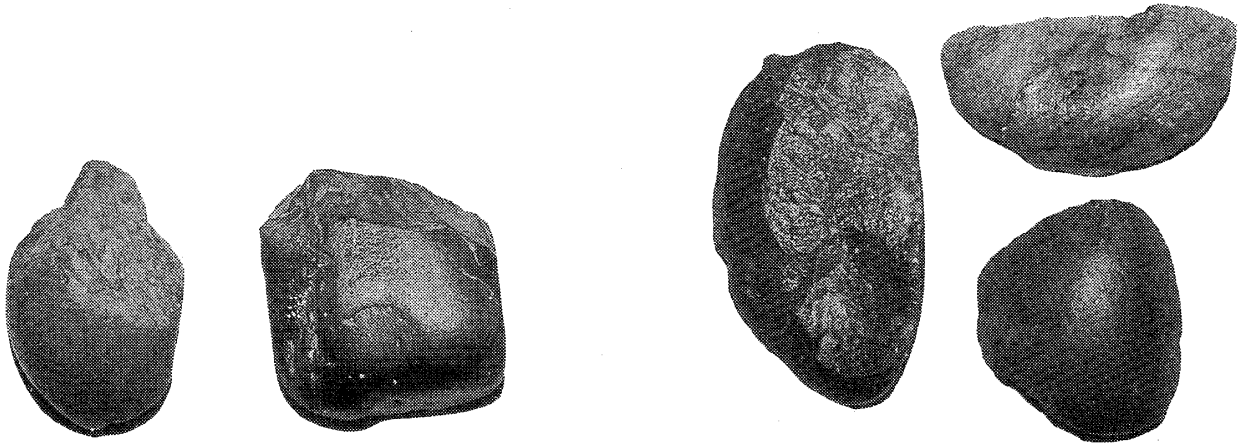
ウスチ・カラコル
 ◆ムステチェ伝統のシベリアステップへの進出

モホヴォII
 ◆アシュール伝統の東漸
 ↓?

(礫器伝統)

モホヴォI クマラII
 ウラリンカ? デイリング・ユリヤフ フィリモシュキ?

↓?



シベリア最古?の石英製石器

手頃な大きさの礫の1端に剝離を施し、粗雑な刃部を作り出した礫器pebble tool、カマボコを切るように分割し、その周辺一部に刃部を作り出したスクレプロ(大型刮器)など、ディリング・ユリヤフの石器群が、ホットな話題を提供している。

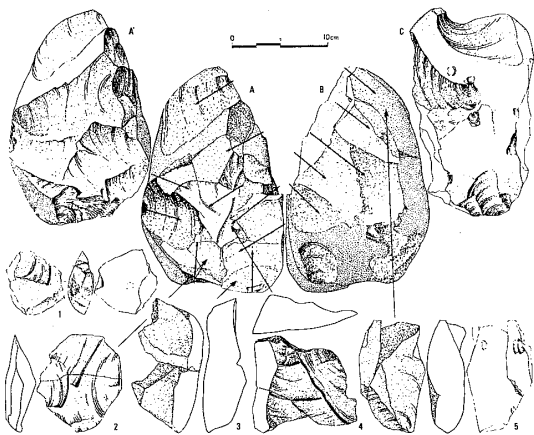
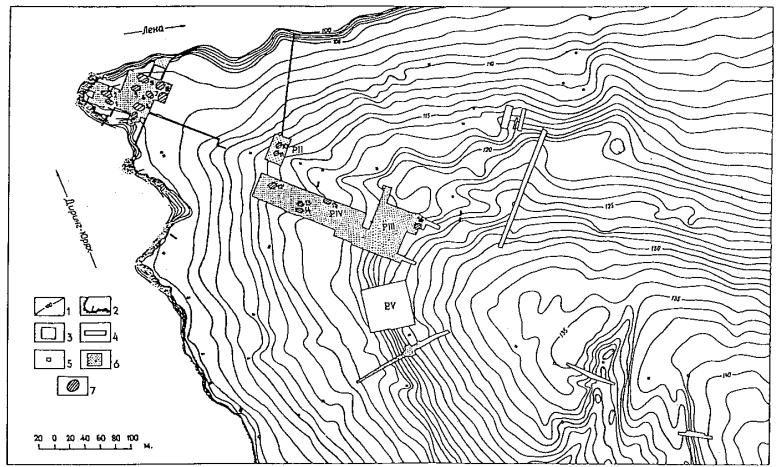
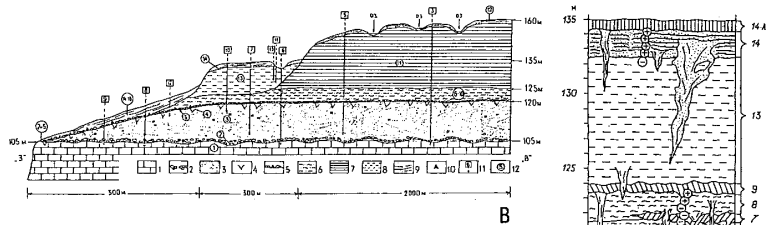


図3-2 第14遺物集中地点出土の接合資料(モチанов 1988より)



A



B

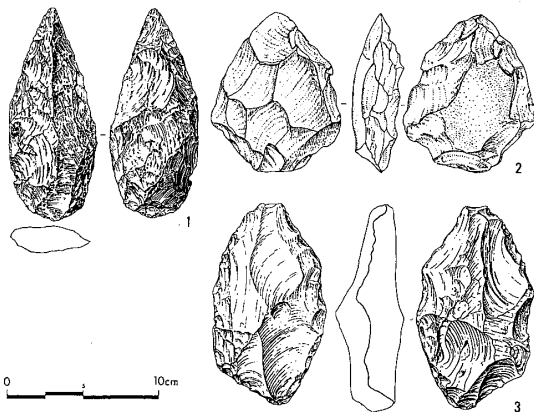
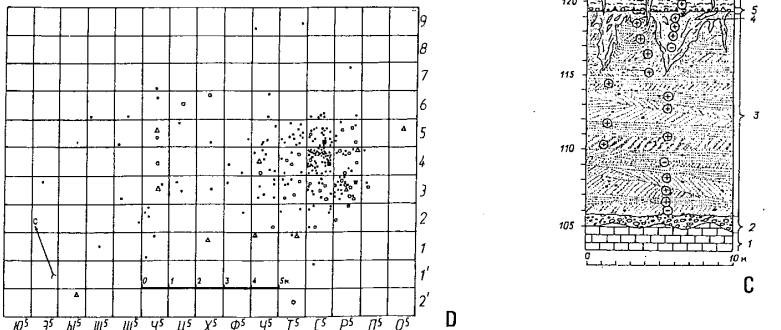
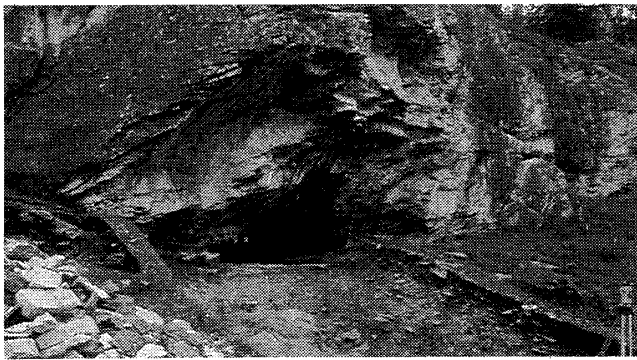
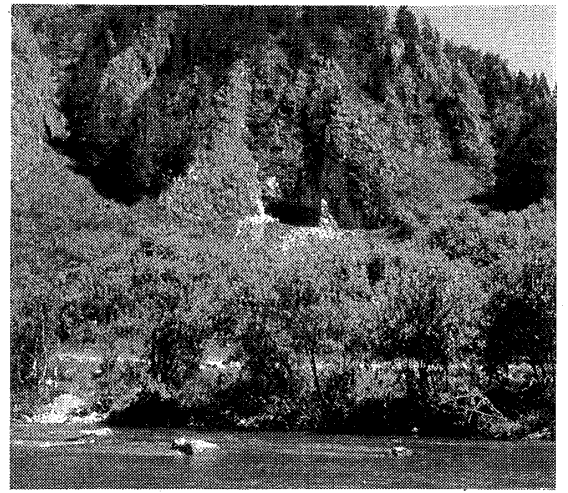
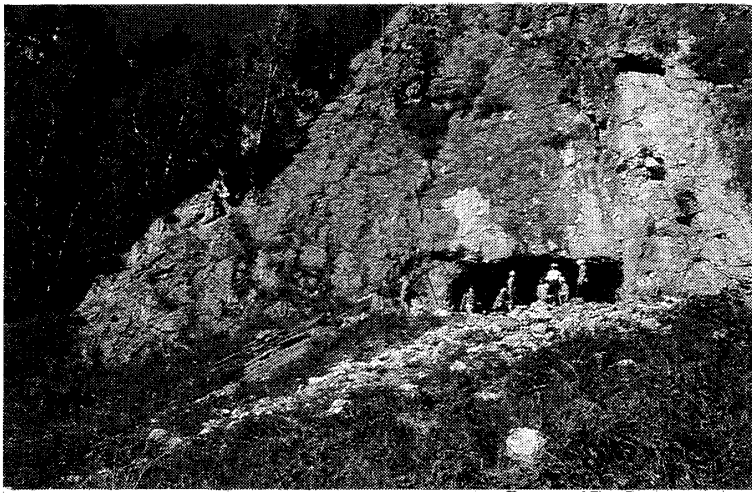


図4 シベリアの「ハンドアックス」
1・モホヴォII(Деревяно 他1990より), 2・ボゴロツコエ(Окладников 1979より), 3・トガレクII(Астахов 1990)



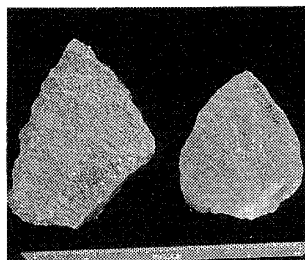
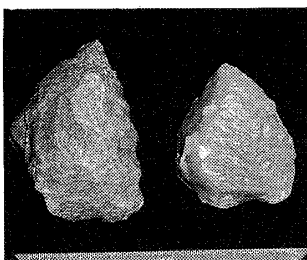
D

図3-1 ディリング・ユリヤフ遺跡の地形図と発掘区(A)、地層断面図(B・C)、及び第14遺物集中地点出土状況(D)
(A~C・モチанов 1988a, D・モチанов 1986より)



シベリアステップの天然住居

シベリアへのまとまった移住は、山地アルタイを中心に行われた、ズリャンスキー氷河期後半のできごとと推測されるが、比較的気候のおだやかなステップ地帯、特に烈しい寒風から身を守ることのできる山あいの洞穴が選ばれ、好んで利用された。チョールヌイ・アヌイ川との比高28mにあるデニソワ洞穴(写真上段)では、22層(最下層)から9層まで数mにもなる文化層が調査され、洞穴の長期利用が判明している。左はウチ・カーミンナヤ洞穴



典型的ムステイエ文化の進出

旧石器時代中期、剥がしとられる剥片(石器)の形態と大きさを想定しつつ石核を調整する技術が、シベリア・山地アルタイを中心に登場する。求心状剥離による円盤形石核や亀甲形石核、それらから剥がされた剥片などルヴァロワ技法にかかわる資料が多数発見されている。写真右はオクラドニコフ記念洞穴出土の通称ムステリアン尖頭器、左2点はブラック貯水湖のイゲチェイ遺跡出土のぶ厚い石英製の類似資料である。日本で言う斜軸尖頭器であるが、むしろスクレグロであろう。

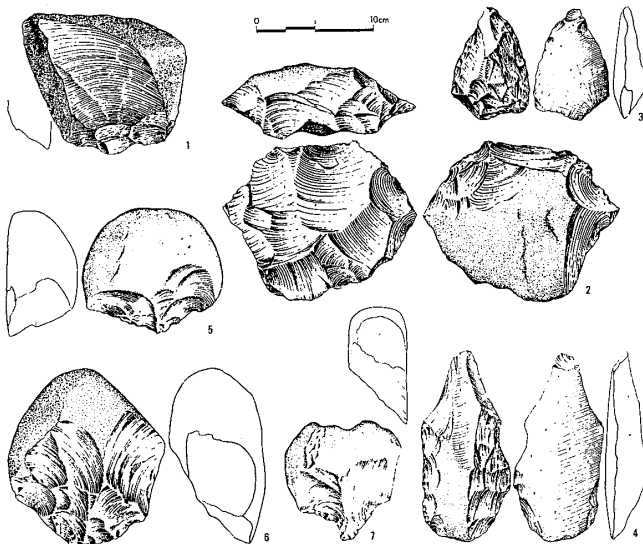
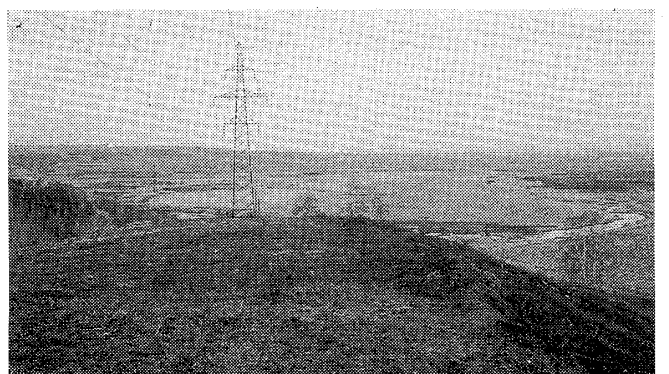


図5 シベリア中期旧石器時代のスクレプロ(1), ルヴァロワ石核(2), ムステリアン尖頭器(スクレプロ・3), ピック様礫器(4~7)
1・デニソワ洞窟(Деревялко и др.より1982年), 2~4・パルシュキナ山(Мелвелев 1975より),
5~7・イゲチェイ浜(Мелвелев 1990より)



アレンボフスキー記念遺跡をはるかにのぞむ

シベリアの代表的な細石刃石器群のヴェルホレンスク山遺跡(手前)からアレンボフスキー記念遺跡のある丘陵をのぞむ(遺跡は丘陵の左に位置)。イルクーツク市の郊外(中心より北方)にあり、途中には、100年ほど前、シベリアの旧石器文化研究の基礎が築かれた陸軍病院遺跡がある。

図6 カラ・ボム遺跡出土の石器群
 1・ルヴァロワ石核, 2・剥片尖頭器, 小型スクレプロ, 4・5・ルヴァロワ石刃(尖頭器), 6・石刃石核, 7・搔器, 8・削器, 9・彫器

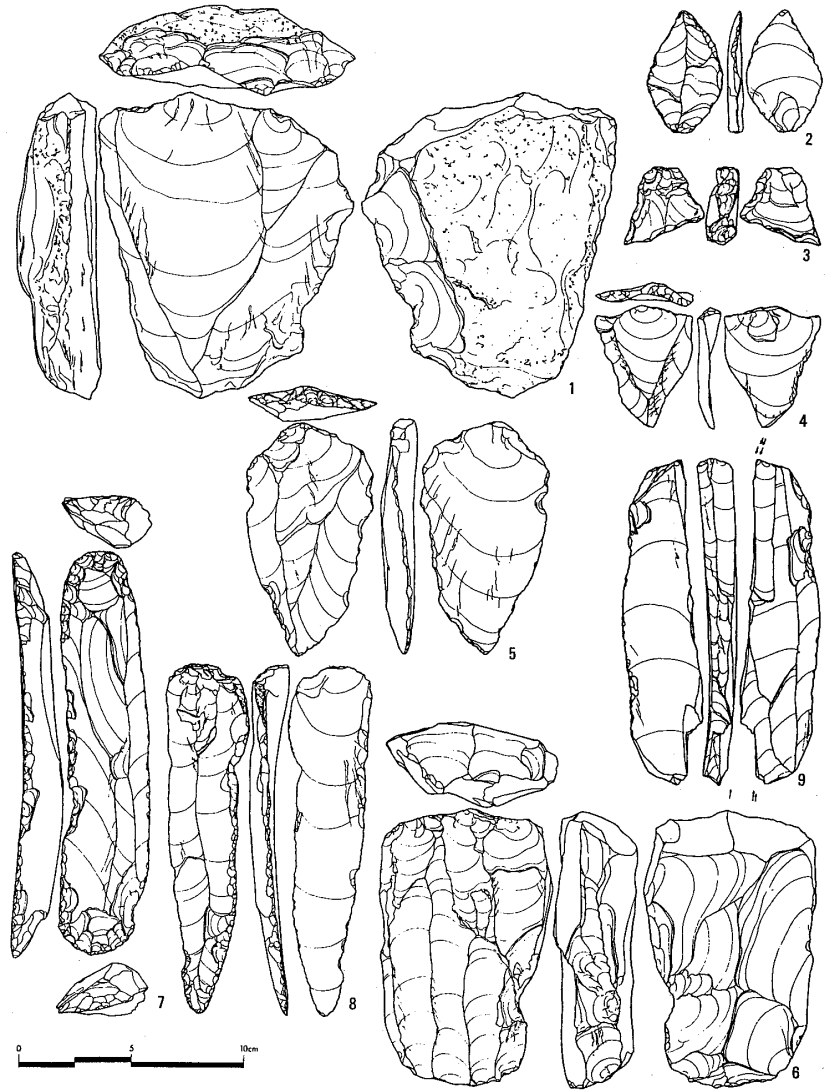
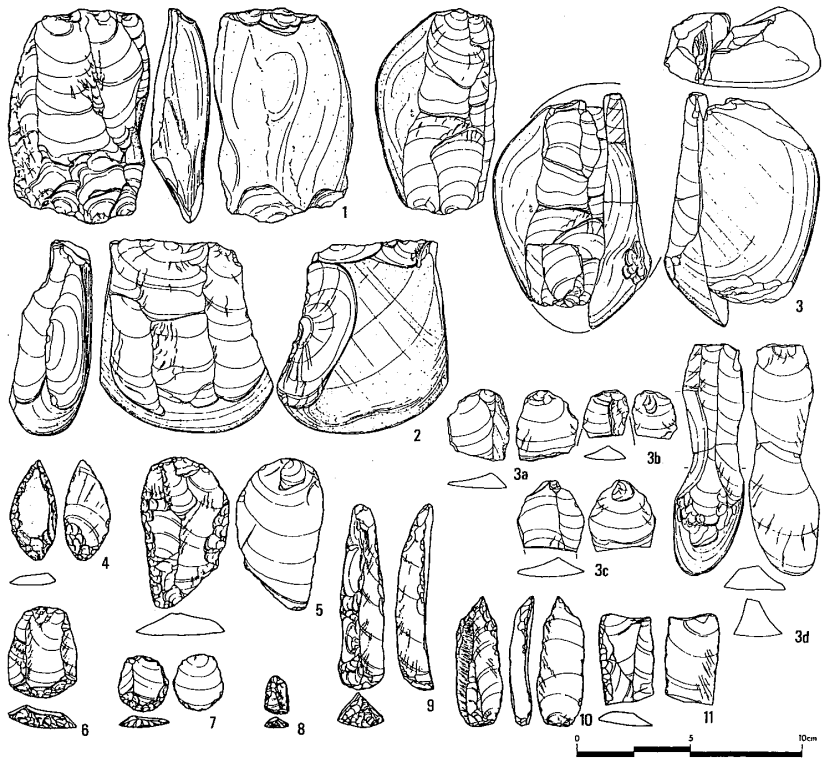


図7 マカロヴォIV遺跡出土の石器群
 1~3・石刃石核, 3a~3d・石刃, 4・尖頭器, 5・11・削器, 6~9・搔器, 10・石錐



最初の体系的な剥片剥離技法（石器製作技法）の出現である。ムステリアン尖頭器やルヴァロワ尖頭器、スクレブロなどの定型的な石器が、洞穴遺跡を主体とするゴルノアルタイ地域の遺跡に集中的に知られている。オビ河上流のアヌイ川右岸に位置するデニソワ洞穴、その下流のソロネシュノエ地区シビリチーハ村にあるオクラドニコフ記念洞穴、デニソワ洞穴の南方およそ五ギにあるウスチ・カージンナヤ洞穴、チャルイシユ川流域のチギレク村北西方三ギにあるストラシュナーヤ洞穴などである（Derevyanko 1990他）。しかしその範囲も今のところ南シベリア、すなわち北緯五〇度以南、東経八五度以西に限られており、シベリア進出のもっとも確かな段階ではあるが、本格的適応、まして酷寒への適応という状況にはなさそうである。

表3は、シベリアの旧石器時代の遺跡から発見されている動物化石の種を表にしたものである。なお、表中の◎は、特に主体をなしているものである。表に示した通り、この段階に属する遺跡からも多くの化石が発見されている。それによると、野馬、ロバ、ついで野牛、毛サイ、ヒツジが卓越する傾向にあり、この段階では、寒地適応の程度をはかるのに格好のマンモスやトナカイの大量捕獲を示す確かな資料は得られていない。概して温かく乾燥したステップ的な動物群からは、寒冷気候下でありながらも、やや穏やかな地域が選ばれていたことがうかがわれる。

なおこの段階、あるいはやや遅れて、分布域がイルクーツク周辺まで拡大する可能性がある（Meibner 1975, Meibner и др. 1990）。ただしここでは、礫器伝統との混在を特徴としており、アルタイの典型的なムステリアンあるいはルヴァロワ伝統のものとはやや異なっている（写真参照）。以降の文化的連続性とあわせ考慮すると、ムステリアン伝統とシベリアにしばしば出現する礫器伝統との接触過程に、シベリアでの「先史モンゴロイド」誕生の第一の契機があるのかも知れない。今後の研究課題である。

温暖期の本格的進出

中期旧石器から後期旧石器の過渡的な段階に、石刃技法が出現する（図6）。石刃技法は、石刃（平面形が短冊形、断面形が三角形ないし台形を呈し、カミソリの刃のような鋭い側縁をもつ石器。長さ二〇センチをこすものがある。これ自体が使われるが、しばしば他の石器の素材になる）を量産する後期旧石器時代を代表する技術である。ゴルノアルタイ・オングダイ地区のカラ・ボム遺跡やイルクーツク市郊外のアレソフスキー記念遺跡の石器群に代表される第四期の段階である。そしてレナ河最上流域、カチュグ町の下流のマカロヴォIV遺跡やハカス自治州・コムムナールの北二〇キロのマラヤ・スイヤ遺跡、ブリヤート自治共和国の首都ウラン・ウデ市に近いヴァルヴァリナ山遺跡などに代表される石刃技法がいつそう発達する第五期の段階が続く（木村一九九二）（図7）。この段階での石刃技法の出現と発達には、カルギンスキー間氷期と結びついている。

カルギンスキー間氷期は、最初の段階は比較的低温で乾燥化していたらしい。後半になって温暖化し、腐植土（埋没土）が発達し、森林も形成されるようになったと言われている（Meibner и др. 1990）。それ故に、人類が拡大しやすかった状況が予想される。図21（▲）は、この時代の代表的な遺跡、しかも年代的に確かなものに限り示しているが、北緯五五度付近にまで生活圏を拡大していたことが理解できる。遺跡の数という点からも、実際にはかなりの広がりが見られる。最近、極北の古環境にかかわるとても興味ある報告が出されている（Johansen et al. 1992）。グリーンランド中心部の氷床コアの深層ボーリングにより北極域の温度変動が再現されたのである。福田は、これをシベリアにあてはめた（福田一九九三）。古環境変動カーブによると、三・三二・二万年頃まで、二・二一・一・四万年頃まで、一・四万年以降におよそ三分される。前期と中期の境が、シベリアのカルギンスキー

(亜) 間氷期とサルタン氷期との境界の推定年代とほぼ一致している。しかし、これまでの予想に反し、カルギンスキー間氷期がおよそ千年間隔で激しい変動を繰り返していたことが明らかにされている。その数は、一―一―二回におよぶ周期的変動である。温暖期には、その温度は後氷期以降のそれに匹敵し、また逆に寒冷期には、サルタン氷期の最寒冷期の寒さをしのぐのである。これらの激しい変動がシベリア全体にあてはまる現象であるのかどうか、今しばらく追試が必要であるが、本期における人類の移住・拡散が、こうした気候に大きく左右されていたことは間違いなからう。また石刃技法を含む剥片剝離技法変遷の要因もまたしかりである。

厳寒への挑戦と適応——「シベリヤーク」の誕生

この発展の連続として、最後のサルタン氷期を迎える人類は、シベリアの酷寒への本格的な適応を果たす。真の「シベリヤーク(シベリヤっ子)」の誕生である。その最初を飾るのが、先に触れたマリタ遺跡に代表される第六期の段階で、およそ二万三千年前頃のことである(木村一九九二)。比較的最近に調査されたウスチ・コヴァー遺跡も、この段階のものである。遺跡は、バイカル湖から流れでてエニセイ河に注ぐアンガラ河の中ほど、すなわち北流を続けたアンガラ河がやがて西流してまもなくの左岸にある(Дроздов и др. 1990)。流域の遺跡群の中でもっとも北に位置しており、この時期に人類が北緯六〇度ラインを突破したことを示している。

バイカル湖に近いイルクーツク市から北西およそ八〇キロに、後期旧石器時代中葉のマリタ遺跡がある。ゲラシモフ博士らの長年の調査で、一万点を越す石器・剥片類と、シベリアではあまり例を見ない象牙製の女性や水鳥を象った丸彫り像など多数の遺物が発見された。また三万点にのぼる動物の骨や角、牙が、当時の生活の様子を詳しく今日に伝えている(Гречинков 1931・1935・1958・1961、木村一九九一・一

九九二・一九九三)。エルモローヴァによると、少なくともマンモス一六個体、毛サイ二五体、トナカイ五八九体、北極ギツネ五〇体、野牛五体、クズリ四体などのほ乳類動物が数えられるという(Ермолова 1978)(表4)。この他、ガンやカモメ、カラスなどの鳥類、若干の魚類が確認されている。グロモフによると、実際の捕獲数は、確認固体数の一〇倍以上になるであろうという。ピドプリチコによるそれぞれの固体重量(肉量予想)(Илюлинчико 1969)に、現代人やイヌイット(エスキモー)などの食肉消費量を考慮し計算すると、マリタ遺跡の推定人口四八―六〇人が三〇年間以上長期滞在できる量となる。夏冬通して遺跡の利用についてはすでに確かめられている。

この段階の特徴の第一は、石刃が小型化することである(図10)。長さ五―六センチのもの一般的で、しかも、それを素材とするさまざまな石器が作られている(図8・9)。マリタ遺跡では、ドリルと搔器(皮なめし具)、彫器など、加工具の生産量(使用量)が非常に目立っている。一方、ウスチ・コヴァー遺跡では、見事に整形された葉形尖頭器(槍先)が多数発見されており、この段階での狩猟具の著しい発達が見える。マンモス動物群の本格的狩猟が、こうした各種の道具、広く技術全般の改良によって導かれたものであることが理解される。

シベリア全域への拡散

さてサルタン氷期の最寒冷期にあたる次の段階で、石刃の小型化の動向は、細石刃技術を確立・発展せしめ、植刃尖頭器(組合せ道具、槍先)を考案させる(木村一九九二)。狩猟技術は飛躍的に増大したとみられる。石器の小型化現象は、世界的な傾向でもあるが、ここではボートのような形をした素材(その後縦割し、ボート形にする)を用いて細石刃(長さ三―五センチ、幅五―八センチ)を剥がしとする技術が採用されている(図13―15)。この細石刃を剥がすための特徴的な石核は、剥し取る作業面(ボートの艫にあたる面)が楔形をしていることから特

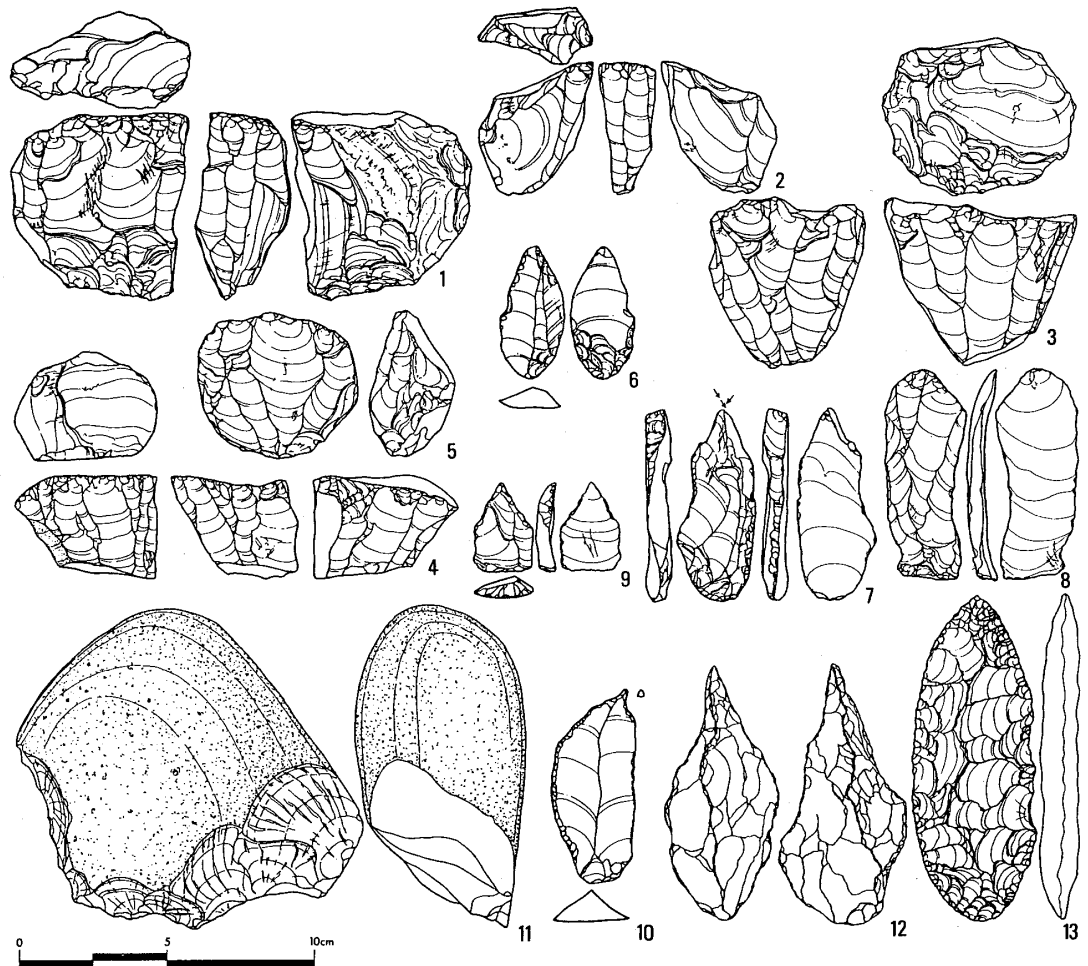


図8 マリタ遺跡(1~11)及びウスチ・コヴァー遺跡(12・13)出土の石器
 1~5・石核, 6・13・尖頭器, 7・彫器+搔器, 8・搔器, 9・搔器+石錐, 10・石錐, 11・チョッパー, 12・
 ビック様石器(類三稜尖頭器)

長さ

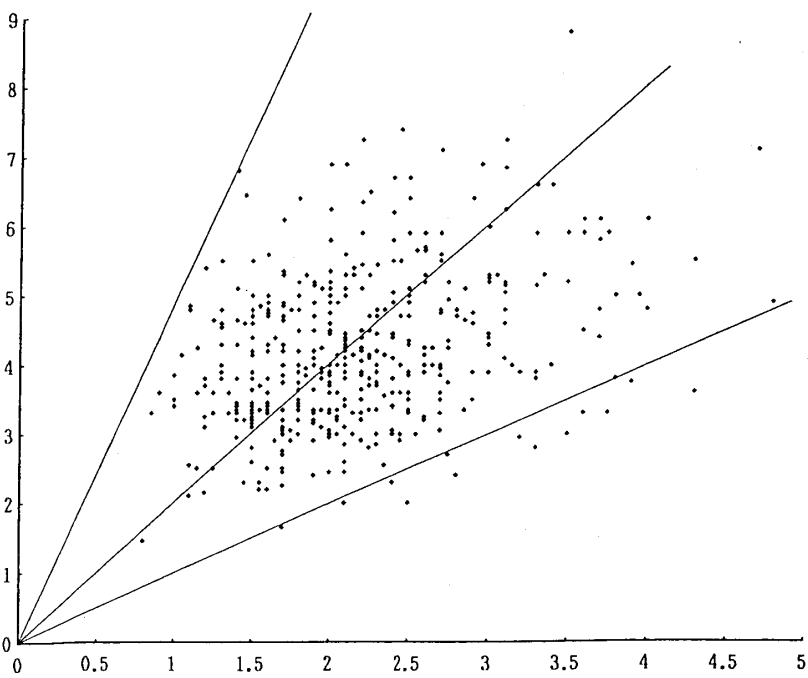


図10 マリタ遺跡出土の石刃・縦長削片の長・幅相関図

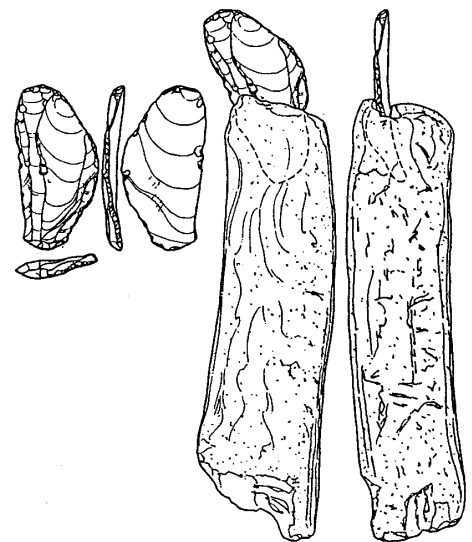
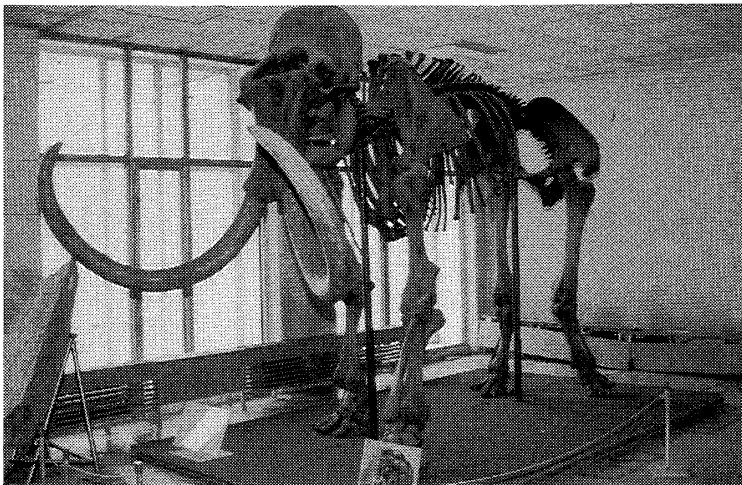


図9 トナカイ角製シャフトに挿入された搔器

幅

マリタ遺跡

アンガラ河支流のベラヤ川左岸段丘上（比高16～20 m）に立地するマリタ遺跡は、世界的に知られるシベリアの後期旧石器時代の遺跡である。写真上は、ゲラシモフの発掘地点に立てられた案内板と、現在発掘を続けているイルクーツク大学のメドヴェーデフ教授。訪れた3月末、川面の多くはなお氷に閉ざされていた。写真下は、対岸よりのぞんだマリタ村と遺跡（台地の上、右からおよそ3.5cmの位置）



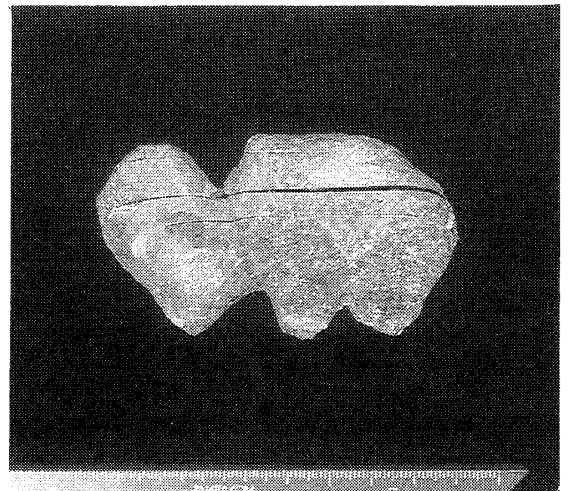
土の中にすむモグラ・マンモス

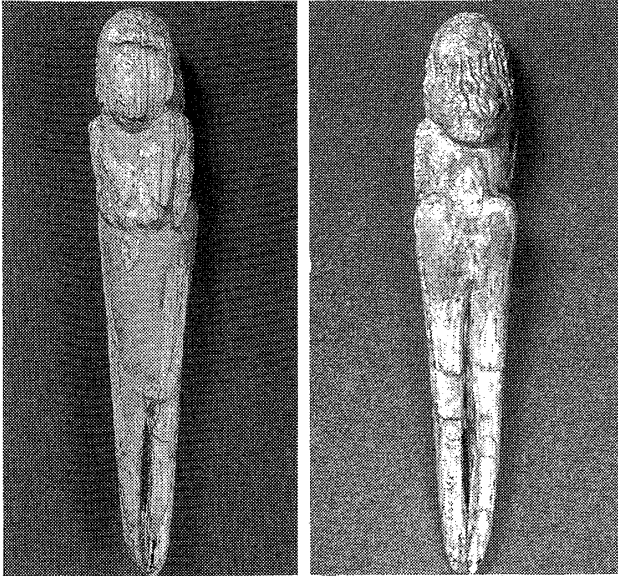
マンモスが歩いたり横たわったりするたびに地面をでこぼこにしますので、怒った神は、マンモスを地下に追放した。マンモスはこうして地下にすむことになった。地震が起きるのもそのせいであるという。極北の凍土地帯に突然出現する冷凍マンモスを見た人びとの困惑ぶりが、この言いつたえによくあらわれている。旧石器時代後期、マンモスのハンティングを中心とした社会が成立した。写真左は、マンモスの全身骨格（ノヴォシビルスクの考古学・民族学研究所蔵）



マンモスの線刻画と丸彫り像

写真左は、長さ8.3cm、幅3.6cmのマンモス牙製の長方形のプレートである。一部欠損している。一端に小さな貫通孔があることから、腕輪もしくは胸飾り、頭飾りの部品と思われる。いくらか湾曲した表面の左側に繊細な線画が位置している。呪術的願いがこめられた護符であろうか。写真右はウスチ・コヴァー遺跡出土のマンモス牙製マンモス像。作りは粗雑であるが、頭の形と肩のコブの様子にマンモスの特徴がある。





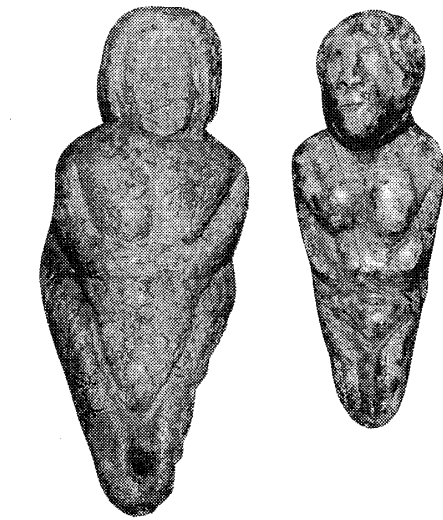
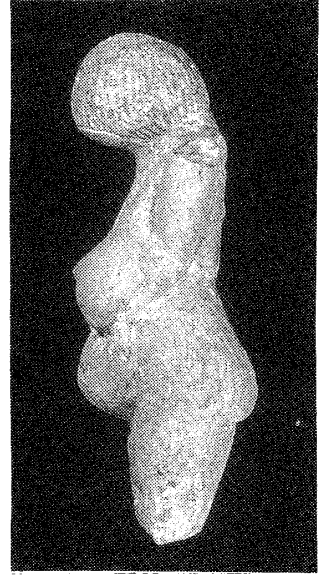
マリタ遺跡のヴィーナス

マリタ遺跡から30点を越える女性像(ヴィーナス像)が発見されており、マリタ文化を特徴づけている。写真上は、大きい頭・胴・脚部の割合が1:1:3、肩部以下細身の逆円錐形、扁平な胸、小さな手と細長の足など、典型的なマリタ様式のひとつである。頭に飾りものか、ジグザグ模様がみられる。長さ13.6cm。写真下は、豊かな胸、大きな臀部など、ヨーロッパタイプに近いもうひとつの様式を示している。しかし、目・鼻・口や衣服を表現する手法は、すでにシベリア的である。左が9.7cm。いずれもマンモス牙製。



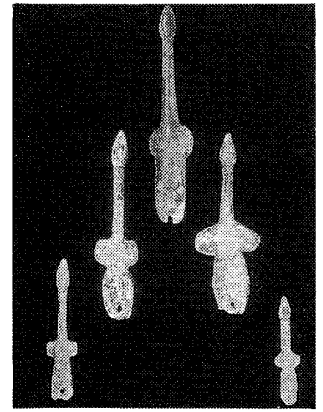
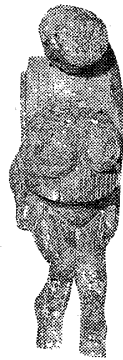
ヨーロッパのヴィーナス

ヨーロッパの女性像は、シベリアのものとはやや趣きを異にしている。裸のものが多く、しかも子供をみごもった母親のように豊かな胸、腹、臀部がリアルに表現されている。安産と豊かな狩猟、社会の繁栄を願う「生み」の信仰を表したものと考えられている。写真は、コスタチョンキI遺跡出土、石灰岩製、うつ向きポーズが独特である。



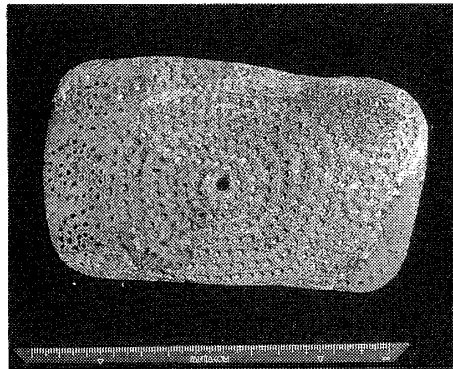
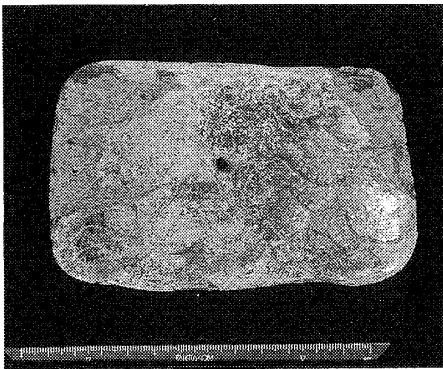
スキップをするヴィーナス

作りは総じて粗いが、両脚が前後に小さく折れ曲がり、あたかもスキップしているかのようなポーズをとる珍しい女性像である。ロシア・ガガリーノ遺跡出土、マンモス牙製



マリタ遺跡の白鳥

体の横に広げる翼、まっすぐ前に突き出す長い首、飛翔する鳥をあらわしている。大小あわせて13点が発見されている。この他、うずくまるポーズの例などもある。ガラスモフは、白鳥、カモ、アビと考へ、特別な信仰があったと推測する。いずれもマンモス牙製である。



蛇の線画とらせん模様のあるプレート

長さ14.1cm、幅8.5cmの隅丸長方形の大きなマンモス牙製プレートの表面に3匹の蛇、裏面に点刻によるらせん模様が描かれている。中央に貫通孔があり、呪符、あるいは胸飾り、帯飾り(バックル)など、特殊な装身具と想像される。一部に蛇が天界と地界を結ぶ呪術的能力をもつ特別な動物と信ぜられている。

に「楔形細石刃核」と呼ばれているが、北緯60度を越えて、シベリア全域に広がっている(図22)。しかもその分布は、これまでになく濃密である。例えばエニセイ河流域のアフォントヴァ山遺跡群とココレヴォ遺跡群、後方バイカルのオシユルコヴォ遺跡(図14)、レナ河上流のポリシヨイ・ヤーカリ遺跡、ヤクーツク・アルダン河流域のジュクタイ洞穴とウスチ・ミリ遺跡群、トゥムルル遺跡、エジャンツイ遺跡、アムール河支流のゼヤ川流域のセレムジャ遺跡群、カムチャッカのウシユキ遺跡などが、その好例である。

楔形細石刃核の起源について、モチャーノフは、レナ河およびその支流のアルダン河に展開した「ジュクタイ文化」にあると考えている(図15)(Mochanov 1977)。ウスチ・ミリII遺跡とトゥムルル遺跡で三万五千年前より古く、またイヒネIIおよびIII両遺跡で二〜三万年前という放射性炭素年代が出されていることによる。この年代は、新大陸への移住を考える際にしばしば引用される重要なものであるが、多くの疑問も残されている。ここでの技術は、マリタ遺跡に見られる小石刃を削ぐための粗雑な「楔形」様の石核(図12-1・2)から発達したもので、マリタ遺跡の年代より古くなることはないと考え(木村一九九二・一九九三)。すなわち、シベリアにおける細石刃と楔形細石刃核の製作は、サルタン氷期に始まり、一万七〜八千年前の最盛期を中心に発達したものである。言い換えるならば、こうした技術革新と装備こそが、シベリア全域への拡散を可能にしたということであろう。しかも発達の初期にあつては、まちがいはなくマンモス動物群と深く結びついている。

一方この種の道具の製作と使用は、マンモスや毛サイの絶滅後も使用され続けるし、その広がりには、北部中国や朝鮮半島、日本列島、アメリカ大陸北部にまでおよんでいる。これらについて、製作技術の特徴や道具の組合せなどをさらに詳しく分析すると、時代的変遷としてだけでは理解しえない、すなわち地域的特色として理解した方が良い

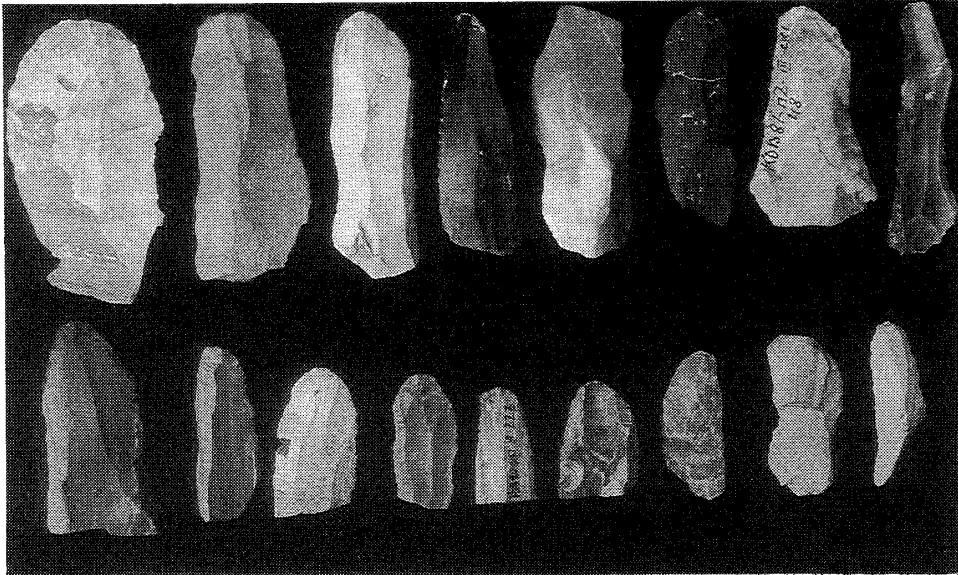
と思われる多様な様相(地域的まとまり)が認められる。例えば、エニセイ以西、アンガラ河流域とザバイカル、バイカル北部、レナ河中流域、アムール河上流域・蒙古・中国北部、朝鮮半島・日本列島南部、沿海州・日本列島北部、カムチャッカ半島、アメリカ大陸北部という具合に、グループピングが可能である。この意味についてはなお慎重な検討が必要とされるが、結論を急ぐならば、楔形細石刃核に表象される大きなまとまりと、そのもとに見られるモザイク模様こそ、厳寒期、さらにその後氷期へと向かう激動の時代における、北方「先史モンゴロイド」集団の形成と分立のさまざまな様相を反映したものであろうと予測する。

少なくとも人類は、更新世の終わりまでに北極海沿岸に達している。北緯七一度、インヂギルカ河の支流ベレリョフ川左岸に立地するベレリョフ遺跡は、シベリアにおける生活圏拡大という壮大な事業の完了を示すと同時に、その事業が、マンモス動物群、とりわけマンモスの転棲と深く結び付いていたことをみごとに示している。およそ一万二千年前(放射性炭素法)、発見された動物化石の大半をマンモスが占めている。人類とマンモスの最後の出会いであったにちがいない(図24)

寒地適応への戦略——道具の小型化と狩猟具の発達

すでに触れたように、生活資源の大量捕獲は、道具素材の軽量・小型化と尖頭器(槍先)の普及、すなわち石器の効率的生産と狩猟用具の改良・発展に導かれたものであると言えよう。とりわけ「植刃尖頭器」の考案は、技術改良の究極にある。

定形的で特殊化された最初の尖頭器は、レナ河最上流のマカロヴォIV遺跡で知られている。同じような例は、やや後に編年されるマリタ遺跡やブレチ遺跡などにも見られる(図11)。石刃技法の小型化と機能に応じた石器の分化が同時に、しかも急速に進みはじめる時期にあたり、小形の石刃の周囲に二次加工を施しただけの簡単なものである。



小型化する石刃
後期旧石器時代に出現した石刃技法は、またたくまに普及し、独自の発達をとげる。シベリアでは、当初15cm以上もある大型石刃が本格的に生産されていたが、次第に小型化し、やがて細石刃の生産へと変遷する。写真は長さ5～6cm、幅1.5～2cm程の大きさが支配的なウスチゴヴァー遺跡出土の小石刃である。

道具の革命・植刃器

マリタ文化までの道具は、人間の手と自然(対象物)との間に完成品が直接介在し、使われる。あるいは柄をつけて使われることもあった。しかし次の細石刃文化の段階になると、まったく新しい発想による道具が生まれる。いくつかの部品(石器)の結合によって1つの機能が果たされる植刃器の出現である。写真は、一部に細石刃を残したリストヴェンカ出土の植刃器である。軸はトナカイ角製

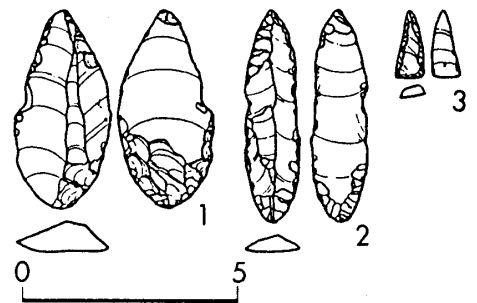
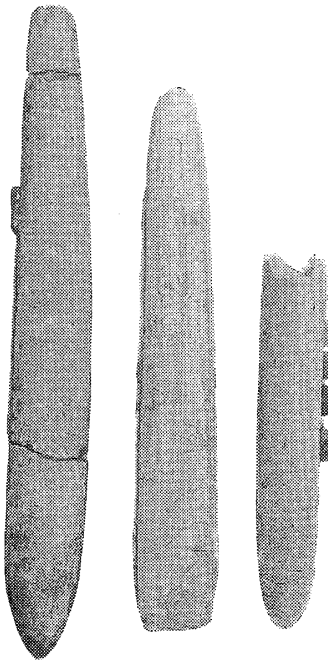


図11 マリタ遺跡出土の石器 尖頭器

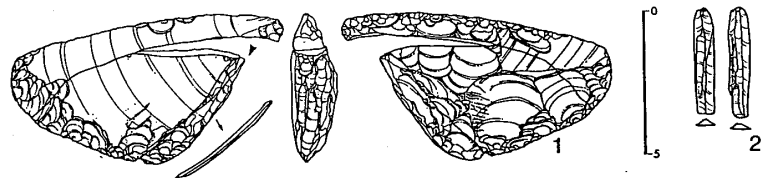
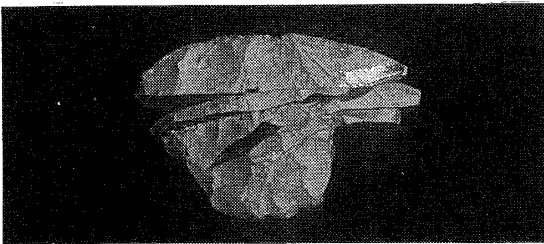


図12 細石刃(2)と楔形細石刃核(1. ヴェルホルンスク山遺跡)



湧別技法の広がり

楔形細石刃核は、東北アジアの特徴的な石器のひとつである。そのうちの、両面加工の槍先形石器を素材とし、縦割りをくりかえしながら細石刃を剥いでいく技術は、湧別技法と呼ばれ、世界的に知られている。その起源がどこにあるか、なお不明であるが北海道を中心に大陸に分布している。打面(甲板面)に擦痕のついた「白滝型」もその一種であるが北海道のしかも黒曜石製に限られており、製作上の工夫(すべり止め)であることが知られる。写真は、レナ河中流のヴォリシヨイ・ヤーカリ遺跡出土。

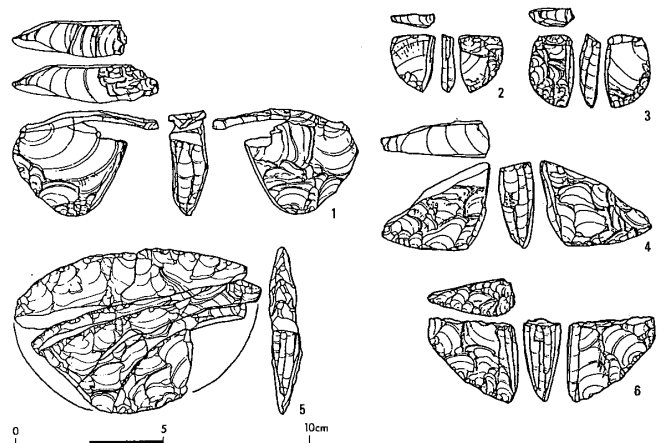
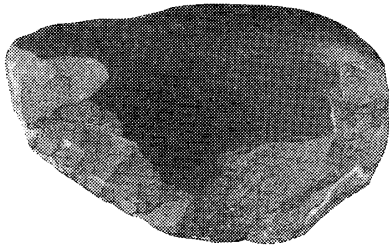


図13 シベリアの楔形細石刃核

1・ソスノーヴィ・ボル遺跡, 2～4・クルラ遺跡, 5・ポリシヨイ・ヤーカリ遺跡 6・ウスチ・カレンガ遺跡



マンモスの解体具？

スクレプロ（大型削器）は、シベリアに特有な石器のひとつである。扁平な円礫や板状の破片の1側縁あるいは1端に鋭い刃部を作りだした石器である。マンモスなど大型の動物の解体具と理解されている。エスキモーのウルナイフに形が似たものもある。写真は、オシュルコヴォ遺跡出土

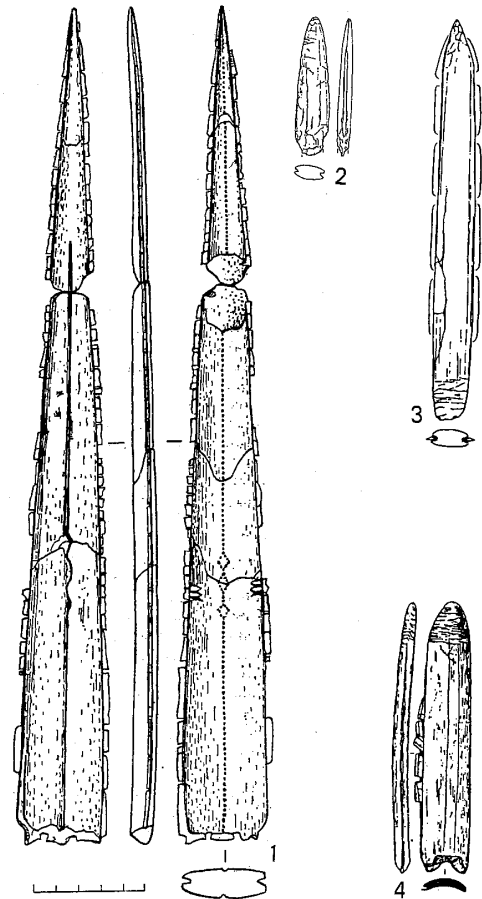


図16 植刃器

(1・チェルノ・アジョーリエ, 2・ヴェルホレンスク山, 3・オシュルコヴォ, 4・リストヴェンカ)

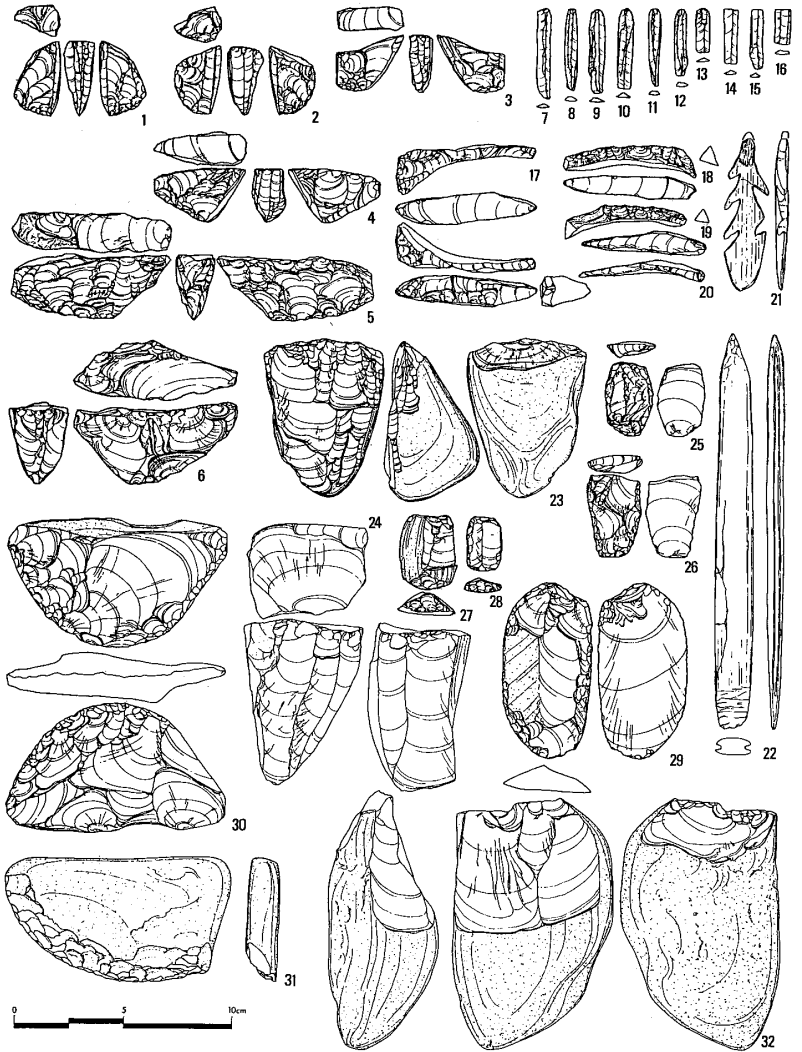


図14 オシュルコヴォ遺跡出土の石器と骨角器

1～6・細石刃核, 7～16・細石刃, 17～20・打面再生剥片, 21・ヴェルホレンスク山型鋤頭, 22・植刃尖頭器, 23・24・石刃石核, 25・26・ヴェルホレンスク山型彫器, 27～29・搔器, 30・31・スクレプロ, 32・チョッピング・ツール(むしろ石刃石核)

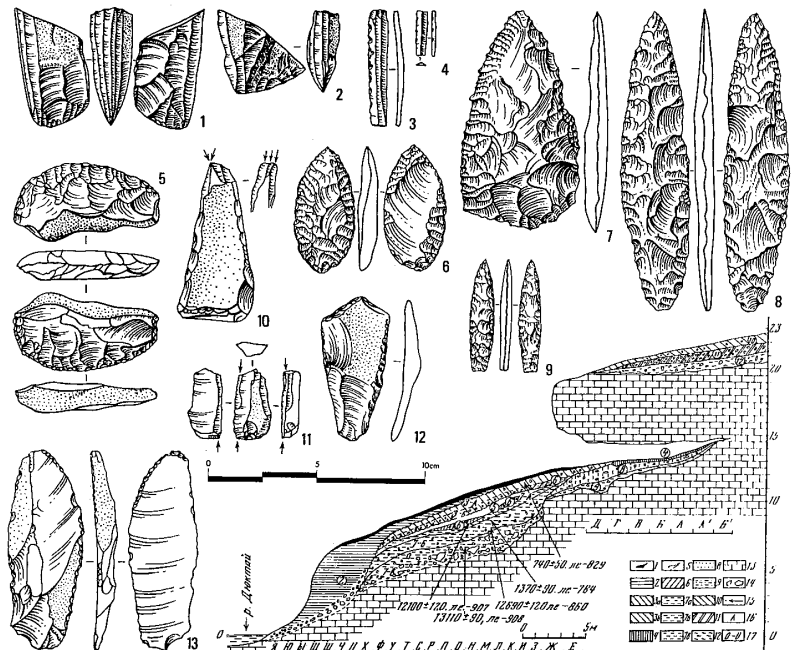
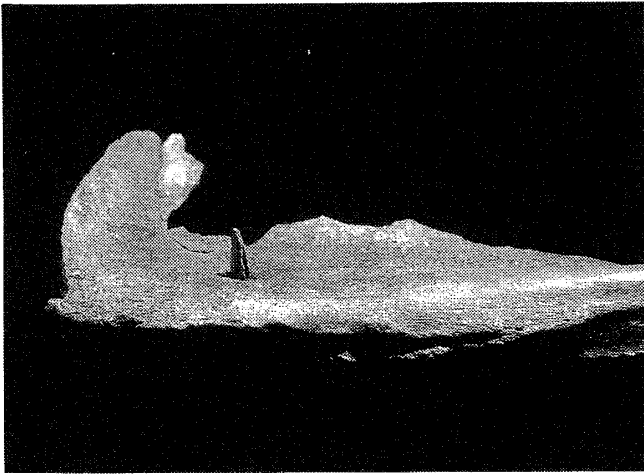


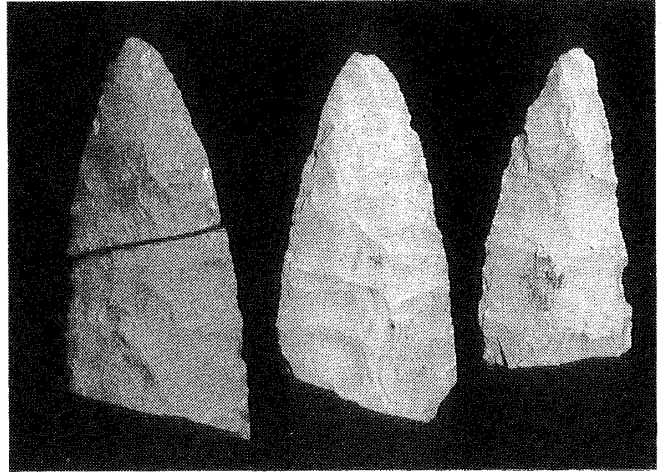
図15 ジュクタイ洞穴出土の石器群と地層断面図(モчанов 1977より)

1・2・楔形細石刃核, 3・4・細石刃, 5・細石刃核プランク, 6～9・尖頭器, 10・11・彫器, 12・13・削器



野牛の肩胛骨に突きささった植刃器

エニセイ河中流域のココレヴォI遺跡で年齢7.5才以上、高さ2mほどの大型野牛の肩胛骨に刺さった植刃器が発見されている。発掘者のアブラモワは、槍先の位置と角度などから、狩人が至近の距離に立ち、1.5~1.6mの高さから水平に射ちこんだことを突きとめている。しかし、野牛の肩を射ぬくほどに強力ではあったが、この一撃が致命傷になったのではないらしい。



投槍の発達

きれいに両面加工が施された木葉形の尖頭器（槍先）は、旧石器時代中期の終りとされるシベリア・山地アルタイのウスチ・カン遺跡から出土している。しかし、ルヴァロワ技法による他の石器と伴うかどうか、問題が残されている。これまでのところ、マリタ段階に普及するとみなされる。写真はウスチ・コヴァー遺跡出土。

長さ四呎ほどで、中には弓矢（矢じり）の出現を思わせる細長で小型の例もある。ウスチ・コヴァー遺跡の典型的な木葉形尖頭器は、この種の道具の急速な進歩を物語っている。

一方、小さなパーツ（部品）から大きな道具を作るというまったく新しい発想からもたらされた組合せ道具（植刃器）は、骨や角・木製軸部の両側縁、もしくは片側縁にカミソリの替刃のように細石刃を埋め込んだ道具である。しかも欠損時の補修がいたって簡単である。およそ尖頭器と削器（ナイフ）の機能をもつ二種が知られており、軸部に細石刃を残す資料がこのシベリアで実際に発見されている。西シベリアのチェルノアジョーリエII遺跡（オムスク北方一四〇キロ、一四、五〇〇年前）の例は、軸部の長さ三八・三呎、幅二・二呎をはかる大型である（図16-1）。軸の両側に埋め込まれた細石刃は、七四個を数える。またレナ河中流のポリシヨイ・ヤーカリ遺跡の例（一五、八〇〇年前）は、いくらか湾曲しているが、長さ二七呎、片側に溝をもつタイプである。またヴェルホルンスク山遺跡では、長さ六呎、両側に溝をもつ有茎尖頭器タイプもある。概して、片側タイプがエニセイ河流域など西シベリアに、両側タイプはアンガラ河やレナ河など東シベリアに濃密である。

エニセイ河ココレヴォI遺跡（一三、三〇〇年前）では、植刃尖頭器が、体高二呎ほどの野牛の肩甲骨に突き刺さった状態で発見されている。この種の尖頭器が強力な役てき器として役立ったことを示す貴重な資料である。

なお、石器の小型化は、素材が小さくすむということを意味し、結果として遺跡と石材産地との結合原理（制約）を一新させ、人類の活動域を大幅に拡大させたと思われる。シベリア拡散を加速させた理由のひとつであろう。

厳寒での装備——住居と防寒具

遺跡から発掘される動物の骨や角・牙は、食料としてだけでなく、住居の建材や燃料としても用いられていたものである。マリタ遺跡での多数の集積は、廃棄された住居の跡であり、おそらく八〜一〇軒で成るムラが場所を変えながら住み続けたものである(図17)。住居は、骨組の上に毛皮を覆い、角や牙、骨などを押さえにのせただけのテント式住居であるが、構造(円形式・長楕円式)の違いから夏用と冬用の相違があったと考えられる(図18)。また赤く焼けた地床炉の跡や、焼け焦げた骨の炭や灰が大量に発見されており、住居の内や外で暖がとられていたことを示している。ちなみに、ヨーロッパロシアの平原では、マンモスの頭部を埋め込み、その上に顎や四肢骨、肩甲骨、牙をドーム状に積み上げた構造的な住居がいくつも発見されている。ウクライナ共和国メジリチ遺跡の一例は、顎の骨の数から九五頭のマンモスの骨格によって作られていることが判明し、研究者を驚かせた。マリタ例よりも本格的な住居ではあるが、形状・構造の点で類似点が多い。

マリタ文化のブレチ遺跡で発見された象牙製の女性像(ヴィーナス像)は、マンモスハンターの衣服の様子を伝える貴重な資料のひとつである(写真参照)。高さ一一・二センチ、肩の幅一・九センチ、痩せ型である。頭の周囲が深く縁どりされ、頭巾をあしらっているようである。しかもその頭巾にみられる斑点は、体から足までとぎれることなく続いており、頭からすっぽりかぶるアノラックのように理解される。すなわち、フード付きの「つなぎ服(コンピネーション)」である。めどをもつ骨製の縫い針が出現するのもこの時期であり、衣服の普及と関連して考えるのが自然である。小型で、いくらか太めのものが目立つが、マリタ遺跡からも衣服を想像させる例が見出されている。

モスクワの東方一九〇キロ、ウラヂミール市の東のはずれにあるスン

ギール遺跡では、二万三千年ほど前の旧石器時代人の墓がいくつか発掘された(Barep 1967)。迫り来る氷河と直接向かい合うヨーロッパ最北の遺跡である。いずれも豊かな武器と華やかな副葬品に満たされているが、そのうちのひとつ、長さ二〇五センチ、幅七〇センチ、深さ六五センチの大きな墓穴からは、三、五〇〇余りのマンモス牙製のビーズなどに全身を飾られた伸展葬の男性(推定五五〜六五歳)が発掘された(図19)。額のこめかみから首筋にかけて隙間なくめぐるビーズは、五〇〇個ほどになるが、出土状況は、ヘアバンドではなく、頭をすっぽりと覆うつばのない帽子に縫いつけられた飾りであることを示している。

その帽子の後ろには、北極ギツネの犬歯一〇個も縫いつけられていた。やはり実際には残されていないが、胴や手、足に接して発見された三千個近くのビーズの状態から衣服の様子が想像される。一枚が身につけられ、もう一枚はその上につけられていた。その身につけられていた衣服は、頭からすっぽりかぶる「貴頭衣」である。紐に通されたたぐさんのビーズが襟や、胸、腹の辺りを交差するように何本も縫いつけられている。とりわけ脇腹に延びる七連のビーズに切れ目がなく、前開きタイプの衣服でないことは明かである。肩の付近、肘の少し上にも、マンモスの牙で作ったプレスレットが数珠つなぎのビーズと組み合わせられている。その直径が同じであることから、やはり衣服に縫いつけられたと見なされる。くるぶしの上と膝の下には、包帯のように、数連のビーズがまきつけられている。しかもそれらと履き物に飾られたビーズとの間が、まっすぐにのびるビーズ列によって連結されている。北方諸民族によくみられる履き物とズボンとがつながったタイプである。ともあれ、牙、歯、角、魚の骨、貝などに飾られた華やかな衣服は、シベリアの諸民族やエスキモー(イヌイット)、インディアンの飾りのついた伝統的な衣服にそっくりであり、長い時間的隔たりを越えて系統関係が予測される。

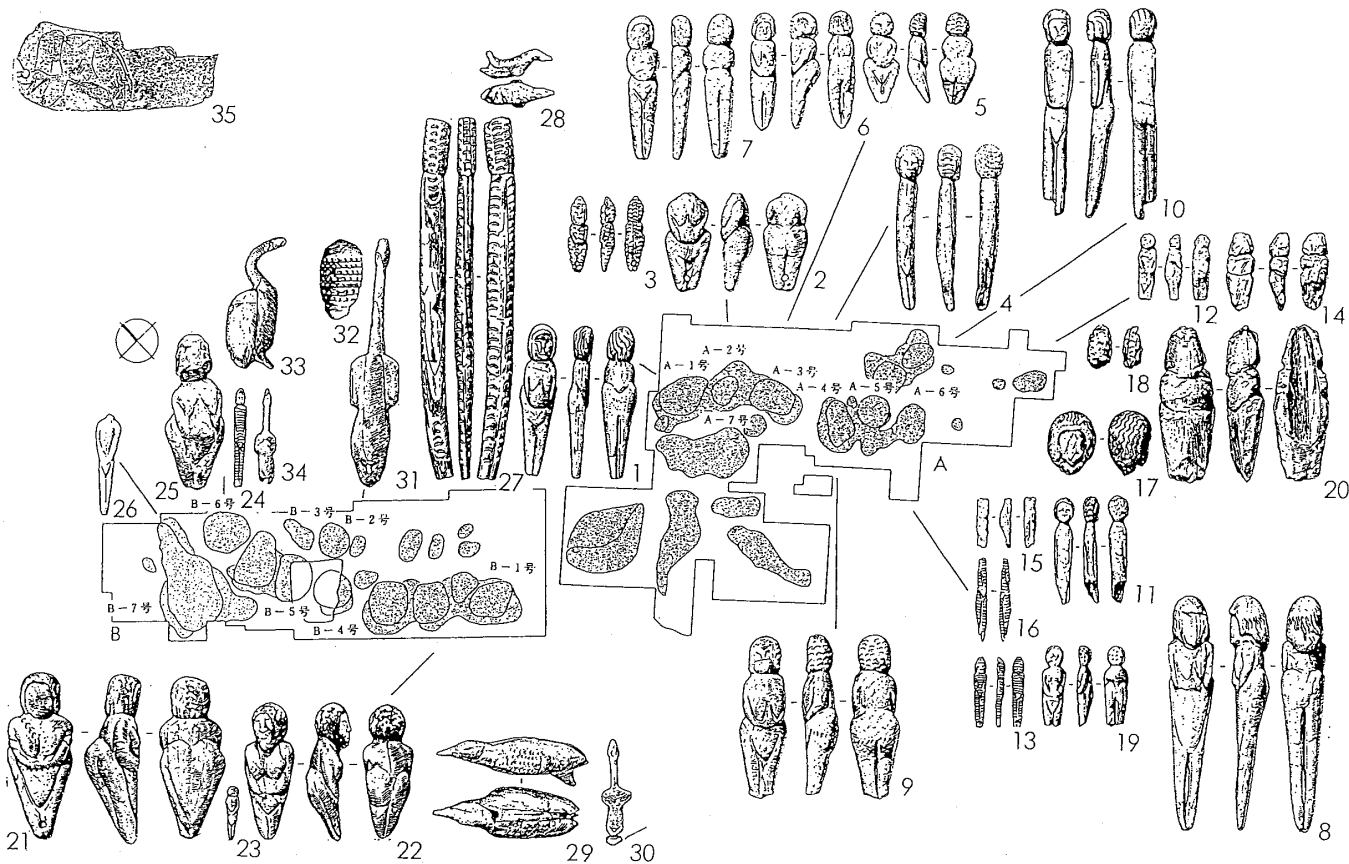


図17 マリタ遺跡の「住居址」群と出土したマンモス牙製丸彫像（女性像・鳥像他）・線刻画（マンモス）つき飾り板（35を除き、Abramova1962より） ※10のみトナカイ角製

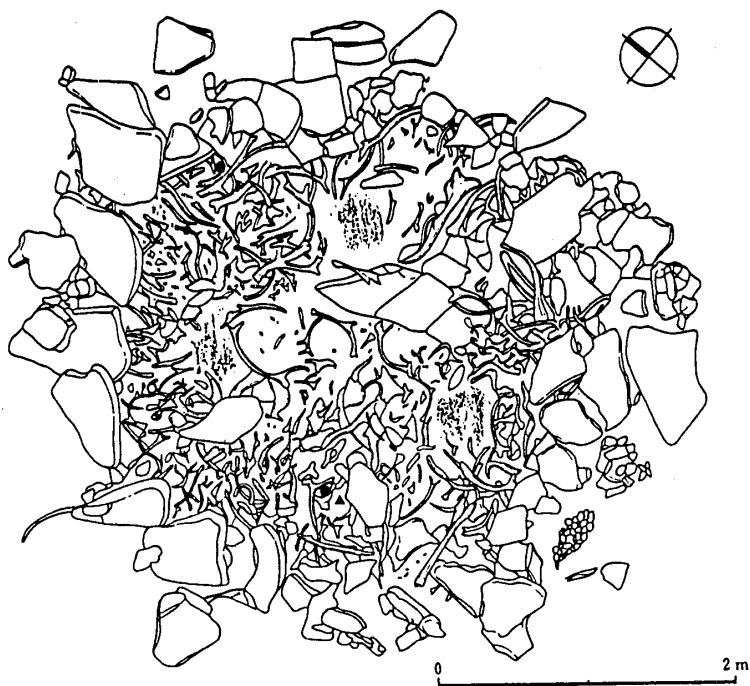
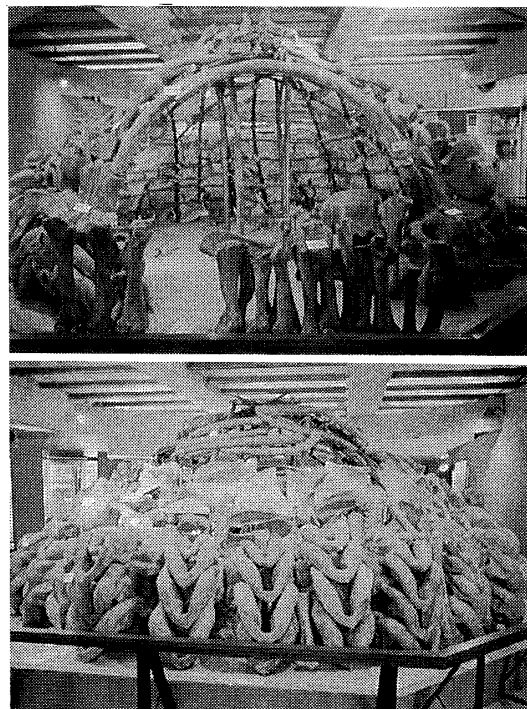
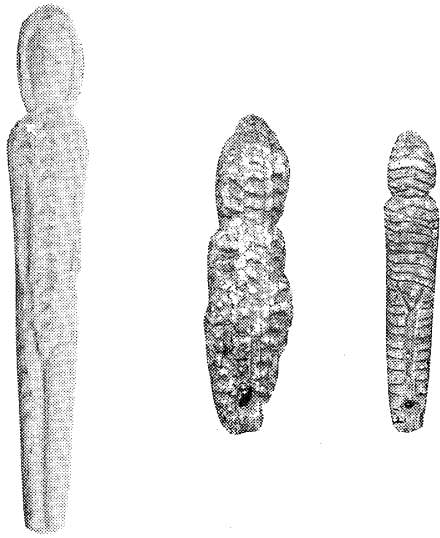


図18 B-6号住居址（Gerasimov 1958より、一部加筆）



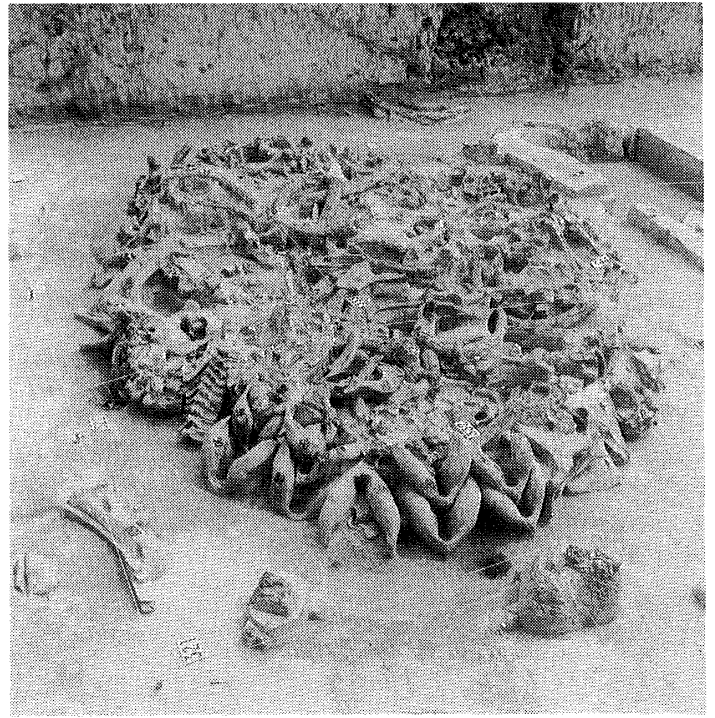
ヤランガ形住居

ロシア・キエフの東南方150kmほどにメジリチ遺跡がある。1966年、マンモスの骨格で作られた円形ドーム状の第1号住居が、ビドブリチコによって発掘された。頭骨と下顎骨が円形（径5mほど）にめぐり、25頭分の頭骨が土台として地面に埋めこまれ、その上には下顎骨が4～5段下向きに重ねられ、さらに牙、肩胛骨が天井におかれる。復元された高さは3mである。新たに3軒、また同じような例がコスヨンキIやユジノヴォ遺跡でも発掘されている。ヤランガは、極北の民・チュクチの伝統的住居である。

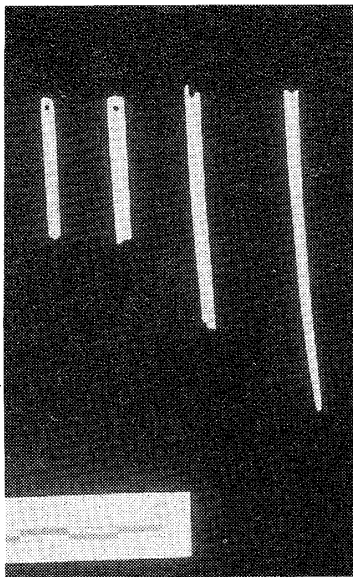


衣服をまとうヴィーナス

顔の周囲の縁どり、全身をおおう刻点は、フードつきつなぎ服（コンビネーション）をあしらったものとみられる。左がブレチ遺跡、右2点がマリタ遺跡出土で、シベリア独特の女性像である。快適な冬季用防寒具なしで、氷河期における人類のシベリア移住・適応は不可能であったに違いない。裸で過ごす原始人は、想像の産物にすぎない。



メジリチ遺跡のヤランガ形住居（第3号）出土状況



ぬい針

目途つきの骨製の針が、マリタ文化になって出現する。穴をあける技術の出現は、指先運動、また脳の一定の発達段階を待たなければならなかったが、一方で防寒具（衣服）の発達と密接に結びついていた。また住居のテントを縫製するためと思われる大型（大型）の突錐もある。写真はオシュルコヴォ遺跡出土

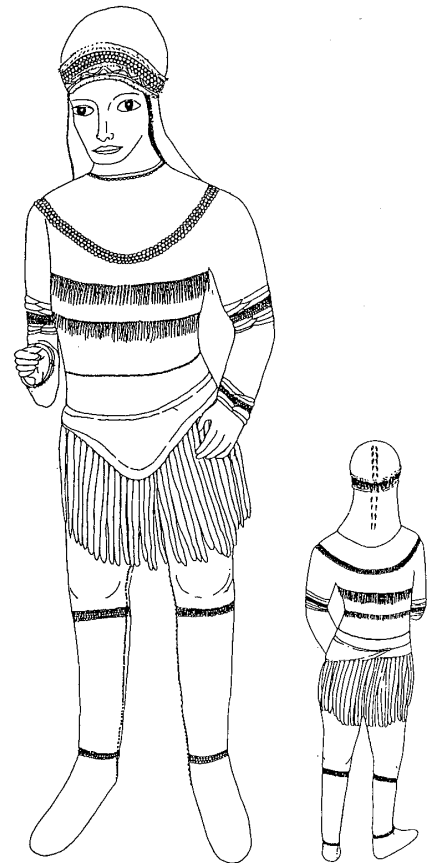


図19 スンギール人の埋葬と衣服（復原想定図）
Athabaskan skin trousersと同じスタイル。
マンモス牙製のビーズやプレスレットが縫いつけられている。 木村アヤ子画

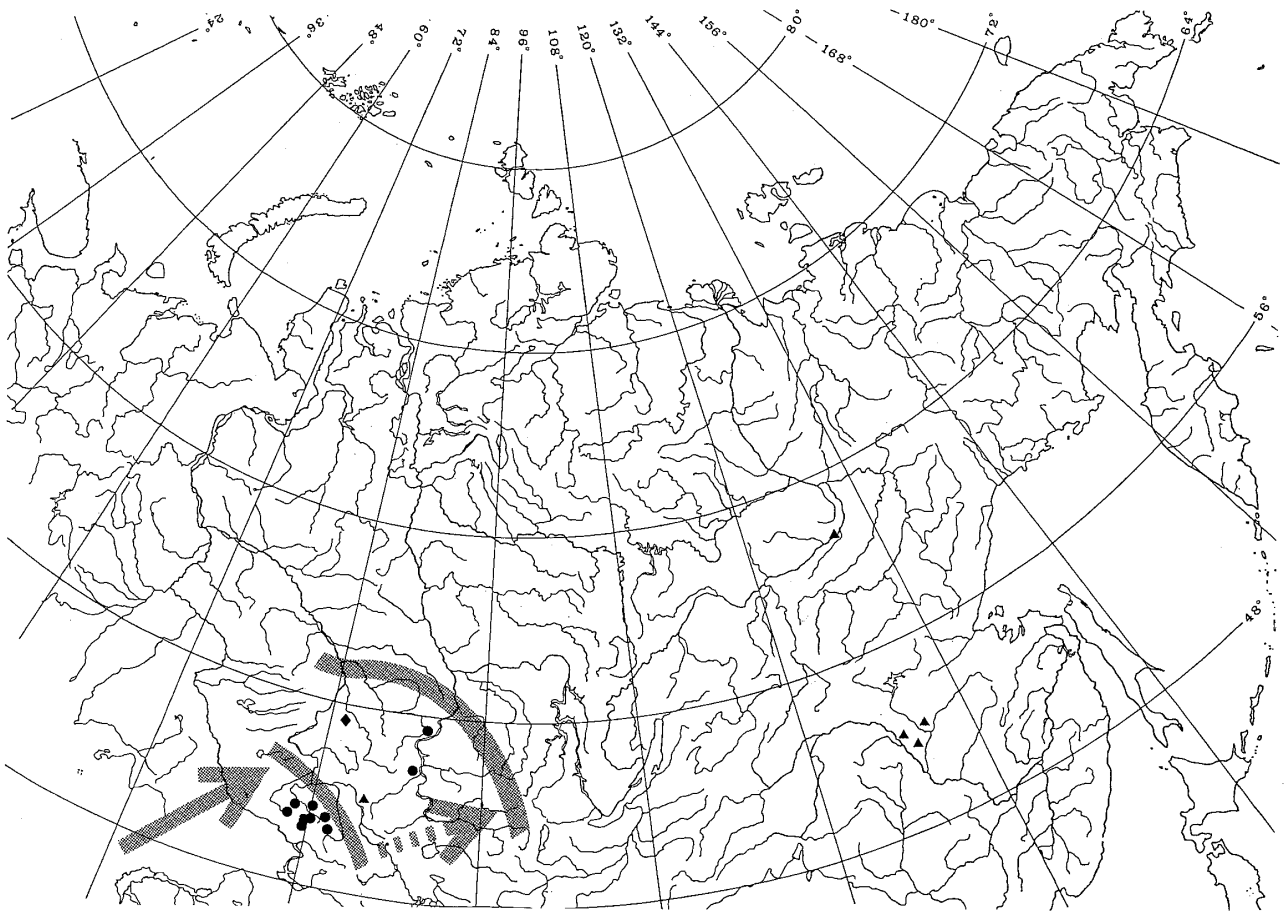


図20 旧石器時代の遺跡の広がり(1)
前期 (▲: I期)、中期 (◆: II期、●: III期)

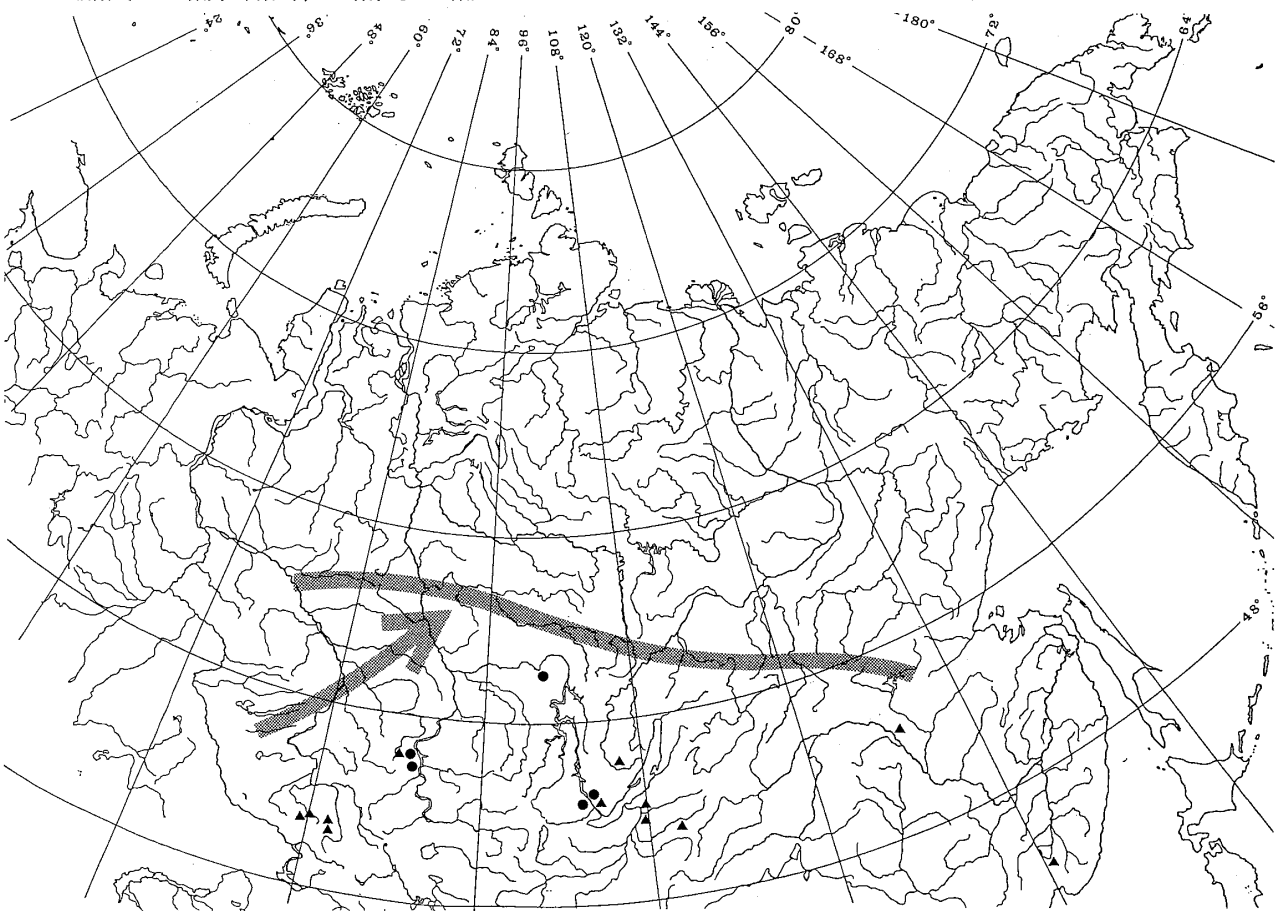


図21 旧石器時代の遺跡の広がり(2)
後期前半 (▲: IV~V期、●: VI期)

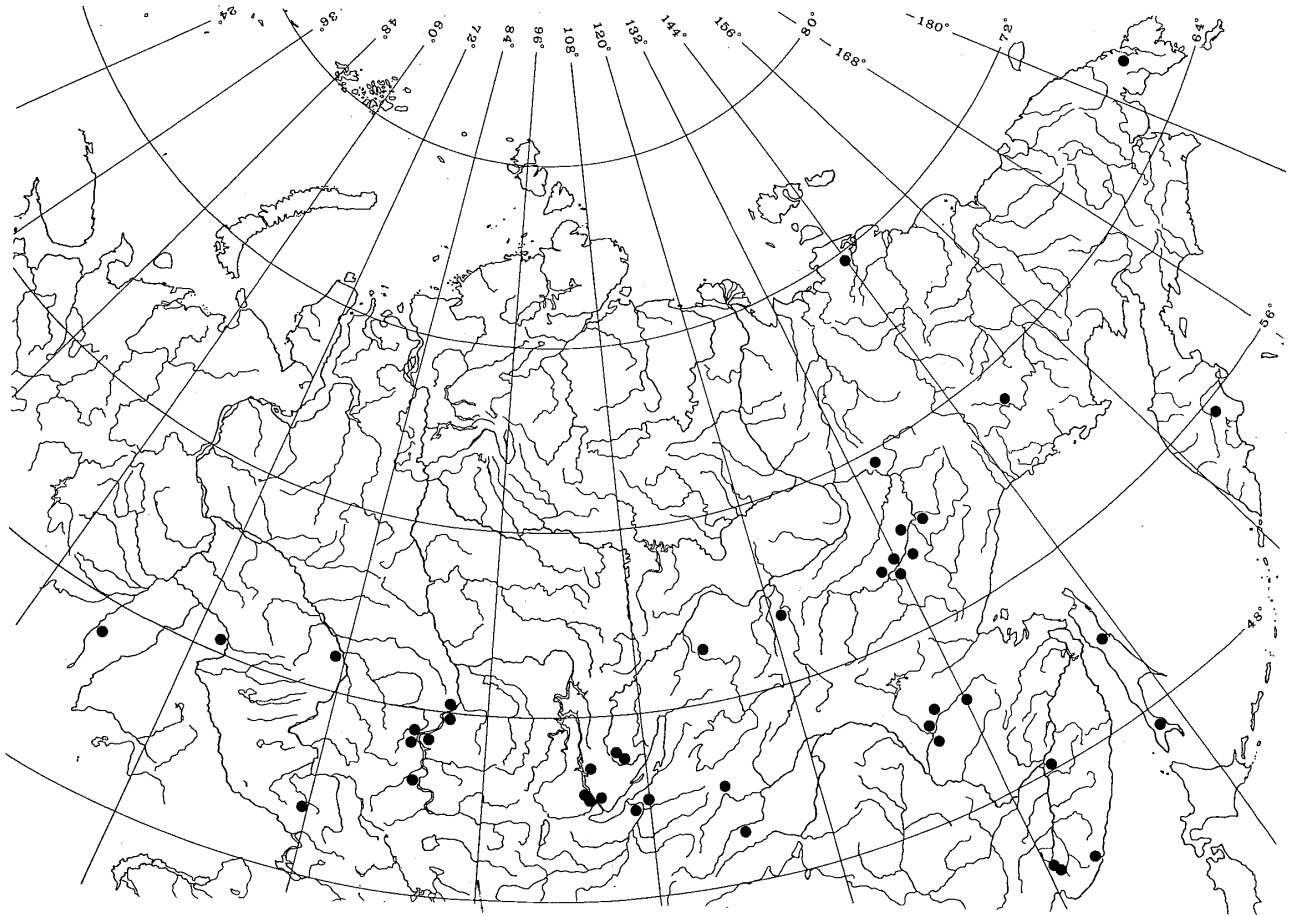


図22 旧石器時代の遺跡の広がり(3)
後期後半 (●: VII期)

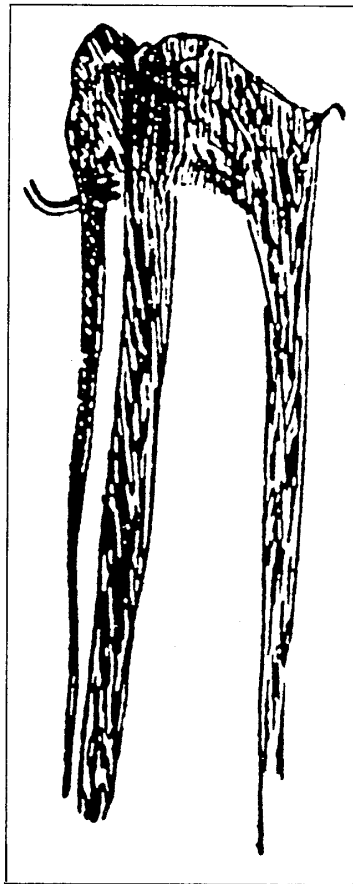


図24 ベレリョフ発見のマンモス線刻画

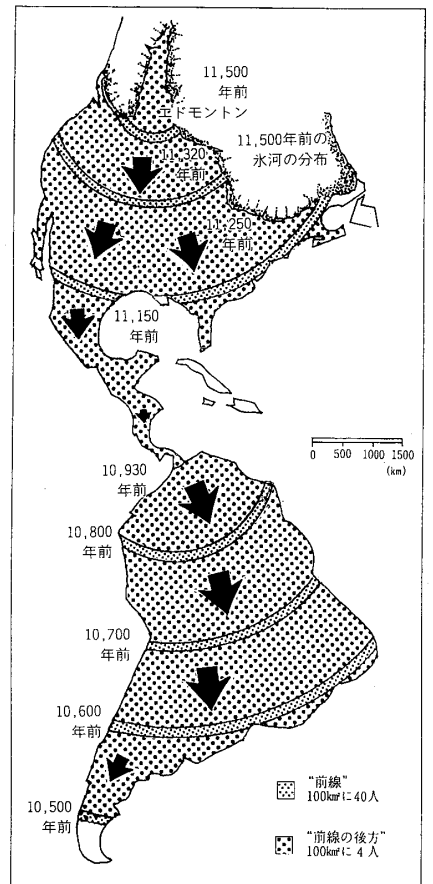


図23 *電撃戦モデル、の概念図
(Martin 1973より)

旧石器時代におけるシベリアへの進出と居住圏の拡大のストーリーを要約すると、大きく三つの段階に分けることができよう(図20~22)。マリタ文化が展開する段階を中心に、それ以前と、それ以後とにである。その前史に見られる進出は、装備や居住域・居住様式の点からシベリアへの本格的適応とみなすのは難しい。事實は、ここでの波状的挑戦が、第二段階での本格的適応をもたらしたということである。「先史モンゴロイド」の出現期でもある。厳寒に立ち向かうマリタ人の装備は、本格的な住居であり、防寒具である。しかしそれもこれも、有り余る動物資源があつてのことである。その大量捕獲は、石器生産の効率化と狩猟用具などの改良・発展に導かれたものであり、それを武器とした人類が、結局は北極圏やベーリング域へと展開できたのである。シベリア進出のエピローグであり、新大陸移住のプロローグでもある。

近年、ラウーヒンらは、極東最北東、チュコト海に流れそぐクイムイネイヴェイ川とミリュトチカイヴェイ川の合流点近くのクイムイネイケイ遺跡から楔形細石刃核と若干の石器を発見し、レンズ状に堆積するモレーン(終堆石)の放射性炭素年代、三九、三〇〇±一、一三〇BP、四〇、一七〇±六二〇BPよりも古いとした(Lavrenko et al. 1988)。そしてモチャーノフによるジュクタイ文化の年代を認め、それらがアメリカ大陸への最初の移住にかかわる資料であるとした。アメリカ大陸移住の時期については、これまで多くの仮説が提示されてきたが、シベリア最東端の資料として注目される。しかしすでに明らかにしたように、楔形細石刃核がマリタ段階より古く出現することは考え難く、ラウーヒンらの考える年代に問題がありそうである。資料は、むしろ一万年をいくらかさかのぼる年代が与えられているアラスカ細石刃インダストリーに対比されるとみるのが妥当であり、これまでの定説を打ち破るに足る資料とは考えられない。ジュクタイ文化が古く

考えられる背景には、カナダ以南に広く分布する細石刃を持たずに、尖頭器の発達が著しいクロビス文化の起源の問題がある。すなわち、クロビス文化とその以北、アラスカを中心に分布する細石刃伝統とは、大きな文化的ギャップを示すにもかかわらず、現状では年代が極めて近い関係にあることから、クロビス文化にかかわる人々の移住が細石刃伝統のそれより一足早く行われたと考えざるを得ないというところにある。クロビス文化の起源にかかわる問題は、依然として謎のまま残されているが、ほのかな光明が与えられつつある。

ライオネル・ジャクソンは、アメリカ大陸への移住に大きな鍵を握る「無氷回廊」の成立時期について、二五、〇〇〇〜二〇、〇〇〇BP、及び一三、〇〇〇BP以降の時期に特定されるとした。これは、海面低下による陸橋(ベーリングア)の形成にもかかわらず、サルタン氷期最寒冷期における移住が不可能であったことを示している。すなわち、一三、〇〇〇BP以降に細石刃伝統(北東アジアからアラスカにかけて)と地域を隔てて並存するクロビス伝統の起源が、それ以前、すなわち二五、〇〇〇〜二〇、〇〇〇BPの「無氷回廊」の成立時期にまでさかのぼる可能性を示唆している。そしてにわかに、北方への適応を果たし、生活圏を着実に拡大し始めたシベリア旧石器文化の第六期、マリタ文化の段階がクローズ・アップされてくる。マリタ文化が、クロビス伝統の技術基盤である石刃技法と尖頭器を作り出すに必要な技術の伝統をもった石器文化であるからである。具体的な証拠にはなお乏しく、またアラスカ地域での貴重な証拠もその後の氷河の発達によって破壊された可能性も強いが、将来の最大で、緊急を要する研究課題であると言えよう。

オーバーキルは事実か——マーティンの「電撃理論」

ところで、一一、五〇〇年前に北アメリカに達した一〇〇人ほどの狩猟民・クロビスハンターが、三五〇年後に、メキシコ湾に達し、ま

た千年後には南アメリカの南端にまで達したと推定し、その間に大型動物を絶滅に追い込むほどの大量殺戮を繰り返したという。最近何かと話題を提供しているアリゾナ大学ポール・S・マーティンの「電撃戦モデル」である(図23)(Martin 1973)。

マーティン理論の大きな難点のひとつは、人類による大量殺戮の問題である。これまでも、ユーラシアにおけるマンモス動物群の絶滅が、オーバークル、すなわち人類の過剰殺戮に原因するという考えが良く知られている。かつて筆者も、オーバークルを考え、先のマンモス九五頭の骨格で作られたメジリチ遺跡の住居を理由のひとつにあげたことがある。キエフ古生物学博物館のネリヤイリノイ大学人類学教室のソファー教授らによって三軒の同じような住居が新たに発掘され、しかも少なくとも一軒の住居の存在が予想されている。仮にこれらが同時期の集落をなしていたとすると、住まいを作るために数一〇〇頭のマンモスが捕獲された計算になるわけである。こうした大量殺戮が日常的に繰り返されていたとすると、と考えたわけである。しかし最近、こうした仮説が正鵠を射ていないのではないか、自然との共存の意味を忘れた「文明人」の一方的な思いこみ、偏見に過ぎないのではないかと考えるに至っている。

果たして旧石器時代人は、マンモスを絶滅に追いやるほどに大量捕

獲をしたのであろうか。その証明にはなお時間を要するであろうが、先にあげた最北のベレリョフ遺跡から発見される大量のマンモス化石は、人類とマンモスの最後の出会いを示すものではあるが、そのような悲劇的場面を想像させるものではない。

先頃あるTV番組で、モンゴル草原に今も生きるオオカミと人々の暮らしたの様子が伝えられていた。家畜や人々に害を与えることがないよう、親オオカミの留守をねらって巣穴にいる幼獣を捕獲し、間引きするのであるが、必ず一匹を残し、決して根絶しにはしないという。オオカミは、一方で草原を荒らす小動物を駆除し、豊かな草を与えてくれると信じているからだという。彼らは狩猟民ではないが、自然界の食物連鎖の仕組みを十分に熟知しており、自然の恵みに生きる人々の自然との共生を示す確かな事実である。

いずれにせよ、年代的データを駆使してシュミレートされたマーティンの「電撃戦モデル」は、興味のあるひとつの仮説ではあるが、狩猟民が自らの生活基盤を破壊する大量殺戮を繰り返したとは到底考え難い。とすると、クロビス文化のそもその起源がマリタ段階にまでさかのぼるとする仮説は、よりいっそう蓋然性を帯びてくるように思われる。今後の資料の蓄積に期待したい。

本稿は、文部省科学研究費・重点領域研究(二)「先史モンゴロイド集団の北方拡散と日本列島への移住」(課題番号・〇四二〇八二〇八)による成果の一部である。

引用・参考文献

- Абрамова, З. А. 1978, Палеолитическое искусство на территории СССР. Москва-Ленинград.
Абрамова, З. А. 1979a, Палеолит Енисея. Адфотовская культура, Новосибирск.
Абрамова, З. А. 1979b, Палеолит Енисея. Кокоревская культура, Новосибирск.
Абрамова, З. А. 1989, Палеолит Северной Азии. Палеолит Мира—Кавказа и Северной Азии.

стр. 143-242, Ленинград.

Аксёнов, М. П., Шуньяков, М. В. 1976, Новое в палеолите Верхней Лены (предварительные данные об исследовании Макарово IV). Древняя история народов Юга Восточной Сибири. вып. 4, стр. 31-55, Иркутск.

Алексеев, А. А., Гохман, И. И. 1987, Костные остатки децких скелетов из погребения на палеолитической стоянке Мальта. Известия СОАН СССР. стр. 54-60, Новосибирск.

Астахов, С. Н. 1990, Открытие древнего палеолита в Туве. Хроностратиграфия палеолита Северной, Центральной, и Восточной Азии и Америки. стр. 40-43, Новосибирск.

Балер, О. Н., 1967, Погребения в верхнем палеолите и могила на стоянке Сунгирь. Советская Археология, No.3, стр. 142-159, Москва.

Герасимов, М. М. 1931, Мальта—палеолитическая стоянка. Иркутск.

Герасимов, М. М. 1935, Раскопки палеолитической стоянки в селе Мальте. Палеолит СССР. Изв. Гос-ого Академии Истории Материальной культуры. стр. 78-124, Москва-Ленинград.

Герасимов, М. М. 1958, Палеолитическая стоянка Мальта (раскопки 1956-1957гг.), Сов. Этн. вып. 3. стр. 28-52, Москва.

Герасимов, М. М. 1961, Круглое жилище стоянки Мальта. КСИД. вып. 82, стр. 128-134, Москва.

Гинзбург, Э. Х., Ранов, В. А. 1981, О комплексном сравнении чоппингов и нуклеусов (на примере палеолитического местонахождения Кара Бура, Южный Таджикистан). Описание и анализ археологических источников. стр. 86-104, Иркутск.

Дебец, Г. Ф. 1946, Фрагмент лобной кости человека из культурного слоя «Афонтова гора II» род красноярском. Бюллетень Комиссии по изучению четвертичного периода. No 8, Москва.

Деревянко, А. П. 1973, Палеолит Дальнего Востока и Кореи. Новосибирск.

Деревянко, А. П. 1975, Каменный век Северной, Восточной и Центральной Азии. Новосибирск.

Деревянко, А. П., Васильевский, Р. С., Молодин, В. И., Маркин, С. В., 1985а, Археологические исследования Денисовой пещеры, Общ. сведения. Преп. Новосибирск.

Деревянко, А. П., Васильевский, Р. С., Молодин, В. И., Маркин, С. В., 1985б, Археологические исследования Денисовой пещеры, Описание плейстоценовых осадков (слой 11-12).

Преп. Новосибирск.

Деревянко, А. П., Васильевский, Р. С., Молодин, В. И., Маркин, С. В., 1985в, Археологические исследования Денисовой пещеры, Описание плейстоценовых осадков (слой 13-18). Преп, Новосибирск.

Деревянко, А. П., Васильевский, Р. С., Молодин, В. И., Маркин, С. В., 1985г, Археологические исследования Денисовой пещеры, Описание плейстоценовых осадков (слой 19-20). Преп. Новосибирск.

Деревянко, А. П., Васильевский, Р. С., Молодин, В. И., Маркин, С. В., 1985д, Археологические исследования Денисовой пещеры, Описание плейстоценовых осадков (слой 21-22). Преп. Новосибирск.

Деревянко, А. П., Маркин, С. В., Николаев, С. В., Петрин, В. Т. 1990а, Раннепалеолитический комплекс из Кузбасса. Хроно-стратиграфия палеолита Северной, Центральной, и Восточной Азии и Америки. стр. 147-160, Новосибирск.

Деревянко, А. П., Гричан, Ю. В., Дергачева, М. И., Земнин, А. Н., Лаухин, С. А., Левковская, Г. М., Магощенко, А. М., Маркин, С. В. Молодин, В. И., Оводов, Н. Д., Петрин, В. Т., Шуньков, М. В., 1990б, Археология и экология палеолита Горного Алтая. Новосибирск.

Диков, Н. Н., Давидович, Т. Д., Ложкин, А. В., Титов, Е. Е. 1977, Комплексное исследование многолетней палеолитической стоянки Ушки на Камчатке. Владивосток.

Дроздов, Н. И., Лаухин, С. А. 1979, Палеолитическое местонахождение в устье р. Кова Среднее течение Ангары. Древние культуры Сибири и Тихоокеанского бассейна. стр. 38-41, Новосибирск.

Дроздов, Н. И., Чеха, В. П., Лаухин, С. А., Кольцова, В. Г., Акимова, Е. В., Ермолаев, А. В., Лемонтнев В. П., Васильев, С. А., Ямских, А. Ф., Демиленко, Г. А., Аргемьев, Е. В., Викулов, А. А. Бокарев, А. А., Фофонова, И. В., Сидорас, С. Д. 1990б, Хроностратиграфия палеолитических памятников Средней Сибири—бассейн р. Енисей. Новосибирск.

Ермолова, Н. М. 1978, Териофауна долины Ангары в позднем антропогене. Новосибирск.

Громов, В. И. 1948, Палеонтологическое и археологическое обоснование стратиграфии континентальных отложений четвертичного периода на территории СССР. Труды Геологического Института АН СССР. стр. 362-369, Москва.

- Даричев, В. Е. 1978, Искусство верхнепалеолитического поселения Магдз Сья. Датировка, виды его и образцы, их художественный стиль и проблема интерпретации. Изв. СОАН СССР Сер. обществ. наук, № 11, вып. 3
- Лавухин, С. А., Дроздов, Н. И., Паньчев, В. А. Беличко, С. В. 1989, Возраст последнего оледенения на Севере-Восточной Чукотки. Изв. АН СССР. Серия Геологическая. № 3, стр. 136-141, Москва.
- Мелведев, Г. И. 1975, Местонахождение раннего палеолита в Южном Приангарье. Древняя История народов Юга Восточной Сибири. вып. 3, стр. 3-36, Иркутск.
- Мелведев, Г. И. 1982, Исследование палеолитического Местонахождения Игетейский Лог I. Палеолит и мезолит юга Сибири. Иркутск.
- Мелведев, Г. И. 1983, Палеолит Южного Приангарья. Автореф. дис. докт. ист. наук, Новосибирск.
- Мелведев, Г. И. Савельев, Н. А., Свинин, В. В. (ред), 1990, Стратиграфия и археология Юга Средней Сибири, Иркутск.
- Мочанов, Ю. А. 1977, Древнейшие этапы заселения человеком Северо Восточной Азии. Новосибирск.
- Мочанов, Ю. А. 1988а, Древнейший палеолит Диринга [Стратиграфия и геологический возраст памятника], преп. Якутск.
- Мочанов, Ю. А. 1988б, Древнейший палеолит Диринга [Стратиграфия и геологический возраст памятника] и проблема внетропической прародинны человечества. преп. Якутск.
- Мочанов, Ю. А. 1988в, Древнейший палеолит Диринга и проблема внетропической прародинны человечества. Археология Якутии. стр. 15-54, Якутск.
- Окладников, А. П. 1979, К вопросу о первоначальном заселении человеком советского Дальнего Востока и находка ашельского рубила в районе с Богородского Ульчского района Хабаровского края. Древние культуры Сибири и Тихоокеанского бассейна. стр. 6-20, Новосибирск.
- Окладников, А. П. 1983, Палеолитическая стоянка Кара-Бом в Горном Алтае. Палеолит Сибири. стр. 5-20, Новосибирск.
- Окладников, А. П., Оводов, Н. Д. 1968, Открытие пещерного палеолита и плейстоценовой фауны в Приморье (Пещ. Географ-ого Общества). Вест. АН СССР, № 10, стр. 54-63. Новосибирск.
- Пидопличко, И. Г. 1969, Позднепалеолитические жилища из костей мамонта на Украине. Киев.
- Ранов, В. Е. 1965а, Каменный век Таджикистана, вып. 1, Душанбе.

- Ранов, В. Е. 1965б, Главные вопросы изучения палеолита Средней Азии. Основные проблемы изучения четвертичного периода, Москва.
- Тернер, К. Г. 1990, Ребёнок верхнепалеолитической стоянки Мальта. Изв. Сибирского отделения АН СССР. Вып. 2, стр. 70-71, Новосибирск.
- Цейтлин, С. М. 1979, Геология палеолита Северной Азии. Москва.
- Шмыгун, П. Е., Ендрихинский, А. С. 1978, Кулинский бескерамический на комплекс на Северном Байкале предварительное сообщение. Древняя История народов Юга Восточной Сибири. Вып. 4, стр. 56-69, Иркутск.
- Derev' anko, A. P. 1990, Paleolithic of North Asia and the problem ancient migration. Novosibirsk.
- Johnsen, S. J., Clausen, H. B., Dansgaard, W., et al. 1992, Irregular glacial interstadials recorded in a new Greenland ice core. Nature. No. 359, pp. 311-313.
- Martin, P. S. 1973, The discovery of America. Science. 179, pp. 969-974.
- Turner, C. G. 1986. The first Americans: the dental evidence. National geographic research. vol. 2, pp. 37-46, Washington DC.
- Vyslnyatsky, L. B. 1989, The Movius's theory and the palaeolithic of Soviet Central Asia (with special reference to some recent finds in Turkmenia). Journal of Central Asia, Vol. XII, No 2, pp. 21-50.
- 葛西 親 一九八九、北アジアのルヴァアロフ技法の拡散、季刊考古学、第二九号、五七一六一頁、東京。
- 木村 英明 一九九一、マリタ遺跡(一)、旧石器考古学、四二、一一一六頁、京都。
- 木村 英明 一九九二a、シベリアの旧石器文化と「礫器伝統」について、大分県丹生遺跡群の研究(古代学研究所報告第三輯)、三四五―三七八頁、京都。
- 木村 英明 一九九二b、マリタ遺跡(二)、旧石器考古学、四四、二九一四六頁、京都。
- 木村 英明 一九九三、マリタ遺跡(三)、旧石器考古学、四六、一一一八頁、京都。
- 齊藤 晨二 一九九一、ヤクーチアにヒトはいつかからいたのか——シベリア最古の人類遺跡にて、モンゴロイド、第八号、一〇―一二頁、東京。
- 福田 正巳 一九九三、最終氷期のシベリアの古環境、文部省科学研究費——重点領域研究「先史モンゴロイドの拡散と戦略」第六回シンポジウム(於・東京大学山上会館、一九九三・一・七―九)。